

Title	古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.2 (1932. 7) ,p.51(197)- 134(280)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0051">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0051</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の 變遷に就て

近山金次

## 目次

前言

序論

A—政情概観(上)

B—Pagus と其の構成

C—Civitas と其の構成

本論

A—Civitas の成因としての Pagus

B—動搖せる Civitas

C—Civitas の王政

D—Civitas の長官政

E—Civitas の長老會議

F—Civitas の民衆

G—Civitas の行政

H—Civitas の都市と城塞

結論

A—Civitas と Civitas との關係

B—政情概観(下)

史料及び參考書

地圖(ケーザル時代のガリヤに於ける勢力分布圖)

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(一九)

五一

## 前 言

此處でガリヤと云ふのは *Cisalpina* の部分を除く *Gallia Transalpina* の總稱であり、又、古代ガリヤと云ふのは、そのガリヤがローマ帝國の屬領となつて其の政治、其の文化に陶冶されるに至る以前の時代、換言すれば獨立せるガリヤの地方民がケーザルの遠征を経て遂にローマの支配下に歸する迄のガリヤである。つまり 52 B. C. に起つた *Alesia* の決戦、そして *Vercingetorix* なる英雄の降服に至るまでのガリヤのことである。 *Vercingetorix* の亂は殆んど此の全ガリヤが一體となつて結合しローマに對抗した様な大事件であつた。此の事件に至るまでの政治制度を觀察し、其處に流れてゐる統一的氣運の變遷を辿つて見ようと云ふのが吾人の目的である。

さて此の問題を解釋するに當つて先づ第一に注意せねばならず且つ最も困難を覺ゆるものは據るべき文獻がケーザルを除いて、頗る僅少であると云ふことである。この時代のガリヤ人は一つの書、一つの碑銘をも後世に残してゐない。主たる而して殆んど唯一の史料たるは即ちケーザルの書なのである。ポリビウスは之より前の時代に生きてゐたがイタリアや小アジアに於けるガリヤ人のことしか餘りよく知らなかつた。然し之は吾人の對象とするガリヤ人の状態と極めて著しき類似、共通の點を有つ事に於て多大の援助を與へてくれるものと云つてよい。デオドルス、ストラボ、降つてデオ・カッシウスの如き

はケーザルの知識に僅少のものしか加味してくれない。然もケーザル自身はガリヤの状況を物語つたのであるが、其は主題のガリヤ戦争に附隨しての話である。ケーザルはローマの將軍であり、ガリヤの歴史家では無かつた。けれども幸ひなことにケーザルは單に一人の武將として筆をとつたにしては驚く程、精密な觀察力をガリヤ及びゲルマニヤに向けて働かしてゐるのであり、前述の如く彼以後の歴史家は殆んどガリヤの知識を此處から汲んだものと言ふべく、かのタキツスの如きも其のゲルマニヤの中には、少なからずケーザルの知識を織り込んでゐるのがうかがはれるのである。ケーザルの書の史的價値に就ては當時の輿論が一致して之を支持した所であり、吾人は最も有力な證人としてキケロ<sup>(一)</sup>、ヒルチウス<sup>(二)</sup>降つてタキツスの名を擧げるだけでも充分である。之に非難の眼を向けた最初の人、アシニウス・ポリオ<sup>(四)</sup>ですらも、其の書の史的眞實性を認むるに吝かなものでは無かつた。

然しながら遺憾なことにケーザルのガリヤは戦時のガリヤであり、言はば異常時のガリヤである。主として動亂の異常を描いた彼の書から一般的事實を抽出して之を綜合することは蓋し容易な業では無いのである。けれども又他面に於て生死の問題に直面してゐるガリヤは外面的、形式的な殻皮を一切取れて其の全裸な眞摯な姿を以て現れてくる。この點に於て吾人は眞のガリヤに關する一層深い知識を得ることが出來よう。

之等の點を考慮に入れて考證を進めて行くならば或程度まで其の目的に近づくことが出来るかも知れ

なら。

- (一) Cicero : Brutus, LXXV
- (二) Hirtius : De Bello Gallico, VII, prep.
- (三) Tacitus : Germania, XXVIII ... summus auctorum.....
- (四) Suetonius : Divus Iulius, LVI

## 序 論

### A—政情概観 (上)

ローマの英雄ケーザルによつて征服される前のガリヤは、凡ゆる點から見ても、一國を成してゐなかつたばかりで無く、漠然たる宗教的信仰を度外視すれば、精神的にも、何等統一されて居なかつた様である。住民は元來互に族を異にする移住民であり、然も諸方より時を異にして入り來つたものであつた。<sup>(一)</sup>

ガリヤ史の大家カミイユ・ジュリヤンは人種學上から之を分類して 『Celts, Belges, Gallo-Germains, Ligures, Celtoligures, Aquitains, Ibères』 に分たれてゐるが、彼等の間には、別に根本的な差異、特徴は見あたらぬ』<sup>(二)</sup>と語つてゐる。元來が何れも移住民であり混血種であつた彼等にとつて之は當然の事實と思はれる。ケーザルは全ガリヤを大別して Belgae, Aquitani, Celtae の三種となし Rhenus (ライン)

以西 *Matrona* (マルヌ) *Seguana* (セイヌ) 以東の地域を *Belgae* に宛て *Carunna* (ガロンヌ) 以西 *Pyrenei* (ピレネー) 以東の地域を *Aquitani* に宛て兩者の間に介在する廣大な地域を *Celtae* (ローマ人に従へば *Galli*) に宛ててゐる。<sup>(三)</sup> 之等のうち中央に位する *Celtae* は明かにガリヤなるものの主體を形成してゐたのであり、南方 *Aquitani* は *Ligures*, *Hiberi* の色彩濃く、北方 *Belgae* は未だ充分 *Germani* の傳統を脱してゐなかつた。ケーザルのガリヤに對する如上の三大區分も恐らく其の理由とする所は其處にあつたものかと思はれる。<sup>(四)</sup> 彼等は凡て同一の言語を有せず、習俗、制度、法律を異にしてゐたのである。<sup>(五)</sup> 此の如く彼等は大體人種的に見て三大別され、政治的、社會的要素に於ても相互に異つてゐた位であるから、従つて彼等の間には別に人種による統一と云ふものを豫想する事は出来ない。彼等はただ一般に *Druidism* を信奉した事からして宗教的に漠然と取り結ばれてゐただけであり、<sup>(六)</sup> 政治的には何等統一されてはゐなかつたのである。加ふるに之等の三大區劃も更に幾つかの *Civitas* なるものに細分され、<sup>(七)</sup> 其が各個に政治的獨立を保持してゐる有様であつた。従つて各地方に共通する利害の問題に就て審議する様な國民的會議がガリヤにあつたか何うか其は全く疑問である。ケーザルは然うした聯邦會議を召集すると云ふ様な制度の有無に就ては全く語つてゐない。ただ時として數個の *Civitas* が集會を催し、彼等に共通な企畫をめぐらすと云ふ様な事はある。<sup>(八)</sup> 然しながら定期的にして恆久的な決定的性質を帯びる會議と云ふものは無かつたらしい。各 *Civitas* を統轄するに足る權威ある機關は存在しな

つたと見るが順當であらうと思はれる。實際のところ彼等は未だ其れ程、共通した利害關係を痛感して居らなかつたのである。ケーザルは屢々 *Concilium Gallorum* なる言葉を用ひてゐるが、此の語の中にはローマの要素が多分に含まれてゐることを看却してはならぬ。例へば 58 B. C. の *Helvetii* 戦役の後、殆んど全ガリヤからの代表者達、諸 *Civitas* の首領等がケーザルの許に集り來つて會議を開いたと云ふ記事がある。<sup>(九)</sup>之は *de sua omniumque salute* (彼等の又凡ての人々の平安) が問題となつた様な重大な會議であつた。そして此の會議の成立になければならなかつた大切な條件は *ut...idque Caesaris voluntate facere liceret* (何うかケーザルの賛成を得て其事をなしうる様に許してもらふ) と云ふ事であつたのである。ケーザルはまだ此の時ガリヤに來たばかりであつた。彼等の間に、もし定期的な法律上、正規な會議と云ふものが存在してゐたとすれば敢えて此の新參者の名前を借りるに及ばなかつたであらう。又ケーザルが自分の面前に各國からの長者を集めて開いたと云ふ會議の如きも斷じて國民的會議と呼ばれ得るものでは無く、實に之はローマの地方政策の常道に従つたものであり、ローマの地方會議に準すべき筋合ひのものである。<sup>(十)</sup>即ちケーザルは春秋二回、彼等を召集して春は軍用の人馬、糧食に就て割當を定め、秋はローマ軍團の冬營に必要な準備をさせた。この會議は必要に應じて所をこそ變へたが常に *ut instituerat* (定められた如く) に遂行されたものである。<sup>(十一)</sup>時として之を掌つた軍事護民官の壓迫に堪え兼ねたガリヤ人の或者が激昂して共に立つと云ふ様なことがあつたにもせよ、<sup>(十二)</sup>そんな結合

は戦時の聯合と同じく此處では問題となるものではない。又ケーザルは軍團の將帥として隨時、必要に應じて *Concilium Gallorum* を召集してゐる。例へば *Rhenus* の彼岸に攻め入る際にガリヤ騎兵の援助を得んが爲に<sup>(十四)</sup>、或は飢饉の際に冬營陣地を割當てんが爲に之を開いてゐる。之は勿論純然たるケーザルの仕事であり、全くローマ的のものであり、彼等の間に斯うした性質の會議があつたとは思はれぬ。*Vercingetorix* がケーザルに對抗する爲に全ガリヤの人々を集合したにもせよ、<sup>(十六)</sup>其は彼等の間に聯邦會議があつた證據となるものではないのである。如何せん、彼等は漸く此の時に至つて初めて *Misoran-tur communem Galliae fortunam* <sup>(十七)</sup>(ガリヤ全體に共通な運命を痛感した)のであつた。もつとも *Concilium* と云ふものがガリヤ人の間に皆無だつたと云ふのでは無い。例へば 57 B. C. に *Belgae* はケーザルと戦ふ爲に *Concilium* を開いてゐる。然し之は極めて地方的に且つ小規模のもので同族の *Penni* さへ之に参加しなかつた位の程度である。<sup>(十八)</sup>勿論 *Ambiorix* が物語つた様な共同感情は、<sup>(十九)</sup>すでにガリヤ人の中に萌してゐたかもしれない。然しながら其が育んでゐた *Concilium* は未だ正規なものでも、公明なものでも無く、<sup>(廿)</sup>密かに森林の奥と云ふ様な隠所で遂行される様な程度のものであつた。

兎に角ケーザルは聯邦會議の制度の有無に就ては少しも語つて居らぬ。もし然うした性質のものが存在してゐたとすればケーザルの書には幾度か出て來ねばならぬ筈のものである。實際には存在してゐたのであるがケーザルが其の召集を禁止したのであらうか。もし然うとしてもケーザルはガリヤの制度を



記述した際に其を物語り得ることであらう。否、ケーザルの遠征前 Helvetii の動亂がガリヤに傳へられた時、其の召集があつた筈である。ケーザルに止まらず、ストラボもデオドルスも、之に就ては何も語つてゐない。如何なる文筆も其を語らず、如何なる事件も其を示さうとしない。

ガリヤの各 Civitas は其の長老達の爲すままに或は互に相争ひ、或は盟約を取結ぶと云ふ様な状態であり、事を企つるにあつても中央の會議に圖るが如き事、或は中央より指令を受くるが如き事は全然無かつたものと推定される。彼等の争ひを正し、相互間の平和を圖るに足る何等の最高權威も無かつた。勿論、中世の基督教會が諸君主の間を取結んだ様に、時として、かの Druid 僧侶達が彼等の間に立つた事もある。<sup>(廿二)</sup>然し争ひが絶え間無かつたことを見れば Druids の努力も效が無かつたものと見なければならぬ。斯くして血腥い争闘が連年續いた結果、<sup>(廿三)</sup>彼等は互に *foedus* (聯合國) となつたり、或は弱少なる Civitas が強大なる Civitas に從屬せしめられて其の *clientes* (被護民) となつたのである。ケーザルが遠征の當時ガリヤに於て二大勢力を形成してゐたと云はれる *Arverni* と *Aedui* とを見て、<sup>(廿四)</sup>前者は例へば *Elentoci*, *Cadurei*, *Gabali*, *Vellavi* と云ふ様な被護民を有つてゐた事實があり、<sup>(廿五)</sup>後者も亦、數多の被護民を有してゐたことがケーザルの記事から推測される。<sup>(廿六)</sup>ケーザルが *Boisac* を攻めた際、*Edouones*, *Nervii*, *Aduatuci* 等は彼等の聯合軍及び被護民を擧げてローマ軍團を襲撃したのであり、就中 *Nervii* は *Centrones*, *Grudii*, *Levaci*, *Pleumoxii*, *Geidumni* と云ふ様な被護民を有つてゐた事が記録

(廿七) されてゐる。又 Belgae の東端部に住してゐた Condrusi は Treveri の被護民となつてゐたらしい。(廿八) 斯くて、時折、或る Civitas が戰運に乗じて他の凡ての Civitas を抽んづる様なことがあつても、然うした覇権は、ほんの一次的のもので、武運に従つて榮枯盛衰し、何等、國民的統一を形成する迄には至らなかつたものと思はれる。

(1) Camille Jullian : Histoire de la Gaule, Tome I.

F. Rice Holmes : Caesar's Conquest of Gaul, part II § II The people—The ethnology of Gaul P. 257—338

(11) C. Jullian : Histoire de la Gaule, II p. 13

(12) Caesar : De Bello Gallico, I, 1

(13) Caesar 全 Gallia (omnis Gallia すべて Tota Gallia) と呼ぶ場合に二種がある。

(a) Celtae, Belgae, Aquitani の全部を含む場合 (cf. De Bello Gallico, I, 1)

(b) Celtae の全部を含む場合 (cf. ib., II, 1)

である。Gallia の名稱は Celtae の別名 Galli が出せる事から見て Celtae が殆んど其を代表するに足る地位にあった事が推察される。

(14) Caesar : De Bello Gallico, I, 1; Strabon : IV, 1, (1)

(15) Fustel de Coulanges : Histoire des institutions politiques de l'ancienne France—la Gaule romaine P. 111

F. R. Holmes : Caesar's Conquest of Gaul, part II § IV p. 525—529 前者は Druids を政治的に輕視するの餘り Druidism による精神的統一を殆んど問題としてゐないが後者は之を駁して例へば Aedui の長官 Vergobretus の選出は Druids によつたものでない (Caesar : De Bello Gallico, VII, 33) を彼等が民事裁判を掌つてゐたこと、全 Gallia の酋長會議のあつた事 Druids

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的气運の變遷に就て (近江)

(104)

の總監督がある事等 (ib., VI. 13) の事實を指摘し、貴族と並んで Gallia の上層階級を形成してゐた彼等 (ib., VI. 13—18) が何等、政治的に勢力を有たなかつたとは思はれず、少くとも宗教上に於て Gallia 全般にわたり相當の統一力を有つてゐたことを力説してゐる。

(十) Caesar : De Bello Gallico, VI, 11 etc.

(十一) ib., II, 1 と見做るは其の一例。

(十二) ib., I, 30—31.

(十三) ib., V, 54

(十四) Fustel de Coulanges : Histoire des institutions politiques de l'ancienne France - la Gaule romaine p 314—319.

(十五) Caesar : De Bello Gallico, V, 27; VI, 3

(十六) ib., VI, 4

(十七) ib., IV, 6

(十八) ib., V, 24

(十九) ib., VII, 75

(二十) ib., VII, 1

(二十一) ib., II, 4

(二十二) ib., V, 27

(二十三) ib., VII, 1

(二十四) ib., VI, 13—20

(二十五) Strabon : IV, 4, (4)

(廿三) Caesar : De Bello Gallico, VI, 15

(廿四) ib., I, 31

(廿五) ib., VII, 75

(廿六) ib., I, 31; VII, 75

(廿七) ib., V, 39

(廿八) ib., IV, 6

## B — Pagus と其の構成

凡そ古代ガリヤの人々は、中央たると國境たるとを問はず、森林に生活するもの山小屋に住むもの、

河川沼澤に居住するものを通じて、一つの共通な生活様式を有してゐた。其はラテン語で Pagus と呼

ばれ、ギリシヤ語で *ποινα* <sup>(二)</sup> と呼ばれた恆久的な性質を有する社會を形成してゐた事である。 Germani,

Belgae, Coltae, Ligures, Hiberi を通じて、この現象は共通であつた様であり、其の Pagus は民事に

於ても武事に於ても公共生活の原始的な且つ最小の要素であると言つてよい。即ち Pagus はガリヤの

政治的性質を帯びる團體としては最も古く、且つ最も小さい分野であつたものと云ふことが出来る。從

つて古代ガリヤに於ける社會的、政治的、軍事的單位は Pagus <sup>(三)</sup> であつた。 Pagus は家族の集團であ

り、上に共通の長者達を戴き、同一の名義の下に團結し、同一の土地に類似の生活を營んで互に交際し、

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(107)

六一

事を裁決するには共に合意の上で之を行つてゐたらしい。各 *Pagus* のものが元來同一の祖先から出でしもの、若くは少くとも同一の祖先より出でたと傳統的に信じてゐたことは推察に難くない。何故かならば彼等の或ものは明かに祖先の名を保持してゐるからである。即ち *Helvetii* の *Pagus* である *Verbigenus* や *rouyenos* 等は *igenus* (五) の子孫) と云ふ字を其の固有名詞の下に附してゐる。然しながら其の傳説はすでに古く、ケーザル時代にあつては神祕的な宗教的なものとなつて居り、他面、政治的な要素が、ずつと加つて來てゐたものと推測される。彼等の間の和合は彼等が感情、危険、希望を共にした家族的生活によつて、もたらされたものであらう。戦争が起れば彼等は共に進軍し、陣營し、戦闘した。(六) 平和になれば彼等は共に聖所に赴いて同じ神々を拜したものであらう。即ち彼等は其の生死を共にしたのである。従つて彼等は其の郷土に強い連帶責任を感じてゐたことであらう。 *Pagus* は斯うした性質上、自然地理的にも合法的に發達したらしく見える。即ち彼等は其の耕地を圍むに森林沼澤を以てし、更に山川によつて他との區劃を定める等、極めて自然的のものであつて、中には現代フランスの *Pays* に其のまま該當するものもあるのである。(七) 斯くして *Pagus* は各々、その地方色を有ち、特種な文化、産物、資源を有してゐたものと容易に推察される。(八) *Pagus* の領域に大小があつたと同様に其の人口にも多寡があつたことと思ふ。吾人は幸にも 50 B. C. 國を擧げてガリヤ内部に移住せんとした *Helvetii* 其他のもの的人口をケーザルの書に於て見ることが出来る。其の圖表は、勿論、子供、老人、

女子を全く包括した數字で、およそ次の如きものである。

Helvetii.....	263,000 (二十六萬三千) <sup>(九)</sup>
Tulingi.....	36,000 (三萬六千)
Latobrigi.....	14,000 (一萬四千)
Rauraci .....	23,000 (二萬三千)
Boii .....	32,000 (三萬二千)

ケーザルに従へば Helvetii は四つの Pagus に分れてゐたのであるから<sup>(十)</sup>一つの Pagus は平均六萬六千人の割合となる。勿論 Pagus には大小があつたことであらうから Helvetii の如き大なる Civitas を形造つてゐた Pagus の中には人口六、七萬に及ぶものがあつたと見なければならぬ。同じ表の Boii なる Pagus は三萬二千、Latobrigi の如きは一萬四千に過ぎず、Pagus の小なるものは一、二萬位の人口を有してゐたのでは無いかと思はれる。

(一) Caesar : De Bello Gallico, I, 12, 27, 37; IV, 1, 22; VI, 11, 23; VII, 64

F. Iuvius : V, 34

(二) Strabon : IV, 3, (3)

(三) Fr. Funck-Brentano は古代法制史家 Sir H. Maine の見方と影響を受けたものか Gallia の政治組織を *familles-clans-tribus-*

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

nation (cité par Peuplade) と云ふ段階を有するものと説き「Gallia とは四、五百の tribu があり、其が七十二の國民を形成してゐた (Caesar)」(Les origines : les Cadres de la Société) と云つてゐるが、之は單なる推論に過ぎず、かかる區別を物語るに足る一片の史料も無く、Caesar の書の内容の一部として引用された文句も何等 Caesar の書中では其らしいものが發見されぬ。Fustel de Coulanges の「Caesar は何等 tribu とか Clan とかに就ては物語つてゐない。Caesar の書中には之等の語無きは勿論、然う云ふ意義を有し語も、又然う云ふ考へを與ふるに足る記事も見出し得ぬ。Diodorus や Strabon に就ても同様の事が言へる。」(Histoire des institutions Politiques de l'ancienne France—la Gaule romaine, P. 8—9) と云つてゐる。然しなほ彼の高弟 C. Jullian は Pagus を譯するに tribu なる語を以つてゐる。他方 Commentarii の譯者として F. R. Holmes, H. J. Edwards, Arnaud, W. S. Bohn 等は之を Canton と譯してゐる。又 Pagus は更に Castellu, Oppida, Vici と相當たる Partes, Regiones と分割され、之等のものが又各 Principes を有してゐた事 (Caesar : De Bello Gallico, VI, 11, 23) を想像されるが、之等のものは獨立の行動を取り得る程、政治的に備はつた團體では無かつた様である。Helvetii 戦争の際、その Pagus の一なる Verbigenus のもの約六千名が逃亡を企つた記事がある。(Caesar : De Bello Gallico, I, 27) 之は勿論、その數から推して Pagus の全員では無い。危急に際し、恐怖に驅られて、其の中の一部のものが唐突に取つた行動であらう。其れ故、此處で問題となる性質のものは無い。

(四) Caesar : De Bello Gallico, I, 27

(五) Strabon : IV, 1, (8); VII, 2, (2)

(六) Caesar : De Bello Gallico, I, 12; VII, 64

(七) C. Jullian : Histoire de la Gaule, II, p. 17—18

(八) Vidal de la Blache は此の影響が今日にまで及び現代フランスの各 Pays は各自の方言、思想、事業を有してゐるのだと説

く云へる。(Tableau de la géographie de la France, p. 15)

## C — Civitas と其の構成

然しながら絶えざる動亂と民族移動とは何時までも *Pagus* を孤立的に存続させなかつたのである。

合縦連衡の法則は到る處に行はれ、彼等は、其の結果幾つかづ、合併して一層政治的に強固な團體を形成する様になり、時と場合によつては其が更に第二次、第三次のより有力な團體を形成して行つたものと思はれる。かの *Massilia* の周圍を取巻いてゐた各 *Pagus* が、より強固な團結を築いて *Massilia*

にあたり、ローマに備へた結果が *Sallies* の如き *Civitas* を生み出した事實の如きも其の適例の一つで

あらう。(一) ケーザルが *Civitas*, *Populus*, *Natio*, *Gens* 等と呼んだものが即ち之である。(六)

ガリヤに於ける斯かる集権的傾向は勿論、場所や *Pagus* の性質等によつて其の活動に、當然遲速があつたことであらうと思はれる。文化の影響が比較的少なかつた *Belgae* や *Aquitani* では、到底中央ガリヤ方面程、早くは無かつたらうと推察される。

さて之等の *Civitas* が各々その *Pagus* に細分されることは論を俟たぬ。*Civitas* は *Pagus* の溶解では無い、集合である。斯くてケーザルの征服直前に於けるガリヤの眞の政治的團體と云へば、之等のも

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(三一)

六五



のなのである。そして之等のもの (civitas, populus, natio, gens) は名稱こそ違へ、内容に於ては全く同じものであり、其は一つの聯合國家、近接せる Pagus の政治的集團であつて、富源と希望とを共に頌ち、戦時に同じ將帥を戴き、平時にも一つの權威に服従する組織となつてゐたのである。(七)

Civitas の大小も Pagus 大小と同様、種々の理由からまぬかれなかつた事と推察される。例へば Volcae, Arverni, Pictones, Lemovices 等は現今の département を二、三寄せた位の大きな範圍に及んでゐるのであるが、之に反して Parisii, Eburones, Viromandui 等は département にも該當せぬ程、小さかつたのである。(八)

ケーザル時代にガリヤに何れ程の数の Civitas があつたかは Pagus の場合と同様、全く不明なのである。カミイユ・ジュリヤンは Pagus が三百乃至四百、之に代つた Civitas が五十乃至六十と算して居り、彼の師フェステル・ド・クローランジュは Pyrenaei 山脈より Rhenus 河岸まで約九十の Civitas を數へてゐるが、(九) 之等は全く推測によるもので何れをどうとも斷じ難い。兎に角、斯うした集權的傾向はガリヤに新しい希望と若さと勇氣とを附與する事になつたのは争はれぬ事實である。各 Pagus は Civitas の主力となるべく何れも最善の努力をしたことであらう。

Belgae 遠征の際のケーザルの記事によれば Nervii, Suessiones は各五萬、Atrebatas は一萬五千、Ambiani は一萬、Morini は二萬五千、Menapii は七千、(十) Caleti は一萬、Vellocasses, Viromandui は各

一萬、Aduatuci は一萬九千、Condrusi, Eburones, Caeroci, Paemani は合せて四萬の軍兵を、それぞれ繰出したとあるから之等<sup>(十二)</sup> Civitas の多くは大抵一萬以上、二萬五千、多きは五萬以上の兵數を擁してゐたことがうかがはれる。Bellovaci の如きは十萬の兵を有したと言はれる<sup>(十三)</sup>。又、Helvetii 戰に於ては彼等の總數三十六萬八千の中で武装し得たものは九萬二千であつた<sup>(十四)</sup>。之、明かに全體の二割五分である。此の割合が凡ゆる場合に適用され得るものとは思はれぬが、大體に於て其の比率は二割乃至二割五分の所位で無かつたかと思はれる。之等の點から見て Civitas の人口は少きものは約五萬、多きものは約四十萬位のものであらうとしたフェヌテル・ド・クラーランジュの推測は根據なき數字では無からうと考へる。斯く見ればガリヤの Civitas は多くギリシヤ、ローマの諸都市に比して遙かに大きな團體であつたと見なければならぬ。

言ふまでも無く之等の Civitas は單に政治上と言ふよりも、經濟上、軍事上の必要から生れ出たものであるから、山川沼澤を利し、交通の一致を圖り、防禦同盟を結び、其の有する豊饒な原野を互に固く守つたのである。彼等が地の利を占めてゐた事は當然と言はねばならぬ。例へば Allobroges は Alpes から Rhodanus 河岸に及ぶ地域を占め、Vienna を首都として、勢力は Geneva に伸び、Grésivaudan の原野を保持してゐた<sup>(十六)</sup>。かの Segunani と Helvetii とが Jura 山脈を挾んで何れも Rhenus を利し、Aedui と Arverni とが兩者共に山嶮により Liger 河の左右に相對した如く、何れの Civitas も地勢に

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(三三)

六七

據つた事は想像する途も無い。(十七)

(一) Justin : XIII, 5 ; Florus : III, 2 ; Strabon : IV, 6, (3)

(二) Caesar : De Bello Gallico, VI, 11 ; VII ; 3, 15

(三) *ib.*, I, 3 ; VI, 13

(四) *ib.*, III, 10

(五) *ib.*, II, 28

(六) 吾人は敢へて之等の語を Caesar の書中たのみ求めた。何となれば Strabon, E. Livius 其他に於ては語の内容が自ら異つた意味を有つ様になり、互に混交し、反つて餘計な繁雜を加へるに過ぎなくなるからである。

(七) Civitas の政治組織に就ては本論に於て詳述する。

(八) G. Julian : Histoire de la Gaule, II, p. 20

(九) *ib.*, II, p. 21

(十) F. de Coulanges : Hist. des instit. pol. de l'anc. France—la Gaule romaine p. 9.

(十一) 九千となつてゐる Text である。

(十二) Caesar : De Bello Gallico, II, 4

(十三) *ib.*, II, 4

(十四) *ib.*, I, 29

(十五) F. de Coulanges : Hist. des instit. pol. de l'anc. France—la Gaule romaine p. 10

(十六) Caesar : De Bello Gallico, I, 6, 11 ; III, 1

Polybius : III, 49, 50

## 本 論

### A—Civitas の成因と Pagus の

Pagus が集合して Civitas を構成するに至つた経路は前述の如くであるが Civitas に集結しても、なほ Pagus は或る權威を保持してゐた。Pagus は其の特有の制度を存續してゐたのである。然しながら今日、其に就て吾人の知り得る事は極めて少であり、ただ戦時に於ける状態を、やや明かにし得るのみである。即ち戦時にあつては Pagus は各自に裁斷して行動するが如き事無く Pagus を單位として出現するのである。けれども一旦、其が行軍の場合や戦闘の場合の如きになると各 Pagus とも自由に活動したものであるらしい。例へば Helvetii 戦争の折、Helvetii の四つの Pagus は順次に分れて行軍した。ケーザルは Arar 河畔に之等の一つを巧みに襲撃して、容易に之を破ることが出来た。<sup>(一)</sup>又 Pagus は各自、軍旗を有して居り Pagus の各員は一緒に陣營し、戦闘し、一軍の中にあつて行動の一致を保つてゐた様に思はれる。<sup>(二)</sup>

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

長い間の共存共榮によつて確く結ばれた各 *Pagus* の人々は互に深い愛情を抱く様になり、彼等の歴史の記憶を誇つてゐたものの様に見える。イタリアの *Insubres* は同名の *Aedui* の *Pagus* から生れ出たと語り傳へてゐた。<sup>(三)</sup> 斯うした話は單なる作話かもしれぬが *Civitas* の中にあつても、なほ *Pagus* が自らの傳統、傳説を愛して之を存續してゐた事實を物語るものであらう。事實 *Aedui* の *Pagus* となれる *Boii* <sup>(四)</sup> の如きは明かに其の祖先 (*Rhenus* 彼岸に住する *Boii*) <sup>(五)</sup> の武名を存續してゐたのである。

又 *Pagus* は前述の如く政治的、宗教的、經濟的機關を存續してゐた。即ち其の領域の中央には大抵、萬一の場合の爲に主となる避難所があつた。例へばガリヤ聯合軍の要塞となつた *Alesia* は其れ迄 *Mandubii* <sup>(六)</sup> の避難所であつた。<sup>(七)</sup> 52 B. C. *Vercingetorix* が攻略せんとした *Gorgobina* <sup>(八)</sup> は *Boii* の城塞であつた。又今日まで残存せる *Carantomagus*, *Vindomagus*, *Argent. magus* 等の廢墟は何れも皆、往時の大市場と其に接近して設けられてゐた禮拜所とを明瞭に物語つてくれる。ガリヤの農民や樵夫等は此所に来つて交易し禮拜を行つたものなのであらう。

*Pagus* は各々その首領を有してゐた。ハンニバル時代には、既に世襲的な王權が確立してゐた様に見える。ローマ人が *regulus* と呼んだ小さな王達が疑ひもなく *Sallies* や *Allibrogas* の中に見あたるのである。<sup>(九)</sup> 近隣の諸 *Pagus* を糾合して *Massilia* にあつた、かの *Catmandus* なる英雄も、この *regulus* の一人であつたと思はれる。<sup>(十)</sup> 然しながらケーザル時代になると斯かる地方的王權は驅逐されて

Civitas の勢力が之に代つてゐた。そして *regulus* は最早世襲的でなく選挙による長官 *princeps* なるものに變化してゐたのである。<sup>(十一)</sup>けれども *Belgae* や北方ガリヤにあつては政情の變遷が他の地方程、進歩的で無かつたからケーザル時代にあつても、なほ未だ地方的な *regulus* の存續を見ることが出来た。其れ故に *Eburones* が *Caturvolens* と *Ambiorix* との二人を王としてゐた様な奇妙な状態が見られたのである。<sup>(十二)</sup> 即ち森林生活を續けてゐた、此の半 *Germani* は容易に一つの確固たる *Civitas* を成立することか出来なかつたのであらう。

(一) Caesar : *De Bello Gallico*, I, 12

(二) *ib.*, I, 12, 27 ; VII, 64, 88

(三) *F. Livius* : V, 34

(四) Caesar : *De Bello Gallico*, I, 23 ; VII, 9

(五) *ib.*, I, 5

(六) *ib.*, VII, 68

(七) *ib.*, VII, 9

(八) *G. Julia* : *Histoire de la Gaule*, II, p. 38—39. — *magnus se forum* の意味である。

(九) *Appianus* : *Εκ της Κελευσης*, 12 (*Θυρίαι*)

*Polybius*, III, 50, (2&3) *ἔω μὲν γὰρ ἐν τοῖς ἐπιπέδοις ἦσαν, ἀπείλοντο πάντες αὐτῶν οἱ κατὰ μέγας ἡγεμόνες τῶν Ἀλλοβόγων*

(*mépos* = *Pagus*. cf. *Strabon* : IV, 6, (3); XII, 5, (1))

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的气運の變遷に就て (近山)

(三七)

七一

(十) Justin : XIII, 5

(十一) Caesar が書中到處に用ゐる *Princeps* なる語は *Civitas* のものと *Pagus* のものとを含むる場合が多い。(cf. Caesar : De Bello Gallico, I, 30, 31 ; IV, 6 ; V, 56 ; VII, 1) Caesar がよくも恐らく過渡期にあつた之等の有力者を區別して書くことは餘りに繁雜で且つ無益なこともあつたのであらう。之と同意語の *Magistratus* (ib., I, 4 ; VII, 33) の場合は *Pagus* のものならん) の場合に於ても同様である。然し *Primus* (ib., II, 3, 13) と *dux* (ib., V, 41) とを呼ばれてゐるものは恐らく *Pagus* の首領であつたと思はれる。之等は區別を立てる方が悪いのかも知れぬ。何となれば *Pagus* の首領として力あるものは *Civitas* を代表するものとなつたにちがひないのである。

(十二) Caesar : De Bello Gallico, V, 24 ; VI, 31

### B — 動搖せる *Civitas*

*Pagus* 及び其の戰士の斯くの如き自由なる状態、團結の精神は *Civitas* の生活に無秩序と無能力とを惹起せしめずには置かなかつた。例へばキンブリ族侵入の時代 *Helvetic* の *Pagus* なる *Tugurinus* は 107 B. C. に至つて終に移住すべく單獨に其の郷土を離れて *Provincia* に進出した。<sup>(1)</sup> 然し此の動搖は成功せずして歸國するの止むなきに終つたのである。<sup>(1)</sup> 又ガリヤの北方に於ける *Morini* はケーザルに對する態度に於て同族の中に一致を缺いてゐたのであり、或る *Pagus* は來り服して多數の人質を出してゐるにかかはらず、他の *Pagus* は公然叛旗をひるがへしてゐると云ふ有様であつた。<sup>(3)</sup> 歴史の古い *Civitas* であらへ、一旦、戦争となると其の住民の間に一致を缺いてしまふことは決して珍らしい事では無かつ

た。一代の英雄 Vereingetrix を生んだ Arverni の首領等は彼に對する反感からローマに心を寄せるものが多かつた位である。<sup>(四)</sup>ハンニバルが Volcae と Rhodanus 河岸に對陣した時、Volcae の或ものは同族との意見の不一致から容易にハンニバルの金によつて買収せられてしまつた事實もあり、又 Allobroges も其の當時 Brancus と其の弟との間の王位繼承争ひによつて二派に分裂してゐたことが物語られてゐる。<sup>(六)</sup>其れ故 Civitas の王と言つても其は要するに幾多の Pagus の首領から、さんざん詮議の擧句、立てられた權威なのであるから、其が Pagus 間に恆久的な一致を生み出すことは恐らく不可能であつたのだらう。此の如き不調は他面 Civitas の中に於ける Pagus 間の不和を立證するものである。統一の制度は未だ餘りに若く、舊來の孤立の習慣、齟齬し合ふ利益、隣人への敵意を制壓するだけの力は無かつた。Salassii の間に見られた如く高地のものと低地のものとの利害が衝突し合ふ様なことがあれば従つて又彼等は相互に氣の合ふ筈も無かつた。<sup>(七)</sup>Civitas を構成してゐる要素の差異は必然的に屢々、彼等相互の間に確執を生んだのである。従つて又同一の Civitas の中にあつても各 Pagus は明かに其の權力に於て差別があつたことであらうと思はれる。大抵の Civitas と云ふものは幾つかの力強い Pagus に對して、其等よりも力の弱い Pagus が追従する事によつて成立してゐたのでは無いかと考へられるのである。又たとへ或る Civitas が戰勝によつて近在の或る Pagus を併合せしめたとしても恐らく其の Pagus に直に他の Pagus と同様の權利を與へることはしなかつたであらう。<sup>(八)</sup>然しながら、此の點に就

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(三九)

七三



て見ても、かの絶えず自己を主張し、政治的自由の特權に戀々としてゐたギリシヤ、ローマの諸都市に比すればガリヤの *Civitas* は遙かに穩かなものだったのである。即ち *Pagus* の *Civitas* 化と云ふことは屢々、想像以上に速かに行はれた。例へば 58 B. C. ケーザルによつて征服された *Boii* の *Pagus* は *Aedui* の希望によつて *Liger* (*Loire*) と *Elaver* (*Allier*) との間に定住することになつたのであるが、十年とたたぬうちに他のものと同じ權利を付與せられ、同じ自由の状態で *Civitas* の中に包括せられる様になつたのである。<sup>(十)</sup> ガリヤの原住民 *Ligures* と侵入者 *Celtae* とが短日月の間に容易に融合し得た事實も、彼等の政治的融合性が相當にあつた事を證明するものと見てよいであらう。<sup>(十一)</sup> けれども、そんな融合性だけではガリヤの内訌、分裂を防ぐ力にはならなかつた。他面ガリヤ人の性格に潛む黨派心は相當に根強いものであつたらしい。其の結果ガリヤに於ては *non solum in omnibus civitatibus atque in omnibus pagis partibusque, sed paene etiam in singulis domibus factiones sunt* (凡ゆる *Civitas*, <sup>(十二)</sup> *Pagus*, *Partes* のみならず、殆んど凡ての家庭に於ても黨派がある) と云ふ状態であつた。ガリヤ人の斯かる黨派心は、ローマの恐威が彼等の身邊に迫つた時ですら、全然姿を没する事が出来なかつた位、彼等の心に食ひ込んでゐた。

又時として *Civitas* の内部が充實して、對外的に發展せねばなくなる場合も生じて來たのである。由來ガリヤは人口過剩の傾きがあつた。ガリヤの女達は多産であつた上に、上手な乳母であつたから人

口は益々、増加するばかりであつた。例へば *Bithuriges* が賢王 *Ambigatus* によつて榮え、人口過剰を來した人達は *Bellovesus*, *Sigovesus* の二將に率ゐられて南方の遠地に移住したと云ふ記事も見あたるのである。<sup>(十四)</sup> 又 *Volcae Tectosages* の間に内亂が勃發して其の結果、多數のものが本國より追放され、之が流轉の末フリギヤに渡り *Celtae* の他のものと合體して *Ancyra* を中心に一つの國家を形成し *Tectosages* の名稱をそのまま用ひてゐた事實もある。<sup>(十五)</sup> 斯うした經濟的要求から必然的に惹起される事變も恐らくガリヤには多かつたであらう。それに又、同じ土地にゐながらも *Civitas* が二分されて、其等が互に新しき別の集團を形成すると云ふ様なことも起つた。例へばハンニバル時代に單に *Volcae* と呼ばれてゐたものが、<sup>(十六)</sup> 後になると、二分されて *Garunna* (*Garonne*) 上流の *Volcae Tectosages* と *Rhodanus* (*Rhône*) 下流の *Volcae Arecomici* とに分立したのである。<sup>(十七)</sup> *Aulerci* も同様分裂してケーザルの書に見ゆるだけでも *Aulerci Brannovices*, *Aulerci Cenomani*, *Aulerci Eburvices* と分れて居り、<sup>(十九)</sup> 然も第一のものは *Aedui* の *Clientes* となつてしまつたのである。又 *Lutetia* の人々は *Senones* のものと一つ <sup>(廿)</sup> の *Civitas* を形成してゐたにかかはらず、後はなれて *Parisii* の名の下に獨立したのであつた。要するに新興勢力があれば其處に勢力の新中心が出来て動亂分裂が起つた事は當然の結果で、其處に又各々の社會が新しい組織を取ることになり、他面かかる混亂状態は分裂紛亂を重ねながらも本來薄弱なりし *Civitas* の基礎を次第に固めて行つたと見るべきであらう。斯くてガリヤに於ける *Civitas* の最初の權

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三三)

七五

威は王政の形式をとつて史上にあらはれて來るのである。

(1) Caesar : De Bello Gallico, I, 7, 12

Strabon : VII, 2, (2)

(11) Florus : III, 3

(12) Caesar : De Bello Gallico, IV, 22

(13) ib., VII, 4 ; VIII, 44

(14) F. Livius : XXI, 26

(15) ib., XXI, 31

Polybius, III, 49

(16) Strabon : IV, 6, (7) 堤防のものは金を採取せんが爲に河脈を細分する結果、低地のものは田畑の灌漑を阻害せらるゝに至り、兩者は互に絶えず武力を講じて争ひつゝる也。

(17) Caesar : De Bello Gallico, I, 28 ; VII, 9

(18) Fustel de Coulanges : La Cité Antiqué, III, 14

(19) Caesar : De Bello Gallico, I, 28

(20) C. Jullian : Histoire de la Gaule, I, p. 249—250

(21) Caesar : De Bello Gallico, VI, 11

(22) Strabon : IV, 1, (2) ; 4, (3)

(23) T. Livius, V, 34

(24) Strabon : IV, 1, (13) Teutosages 衣冠の居轉せ Caesar : De Bello Gallico, VI, 24 以下参照。

(十六) T. Livius : XXI, 26

(十七) Justin : XXXII, 3

Strabon : IV, 1, (12—13)

(十八) Caesar : De Bello Gallico, III, 17, 29

(十九) ib., VII, 75

(廿) ib., VI, 3

## C—Civitas の王政

Celtae の中に於ける最も古き傳説的な主領は前五世紀の中葉に於て Bituriges の王たりし Ambigatus である。(一)

Gallia に於ける Civitas の王として最も古く知られたものは前三世紀の末葉にあつて Allobroges の王なりし Branens である。(二)

之に次で Arverni, Carnutes, Nitobriges, Senones, Segunani 等の Celtae も王を有し、又 Belgae の Eburones, Suessiones も王を有してゐた記録を残してゐる。之等の王は支配權を有して戦時には將帥と

なるべき人であり、人々の主導者たるの位置を以て自ら任じたものであらう。又其は疑ひも無く多少、宗教的性質を帯びたものであつたかもしれない。と云ふのは其が世襲的であり神聖な家族の人々に限ら

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三三)

れ、<sup>(十)</sup>ゐた點からも推測されるのである。然しながら *Allobroges* の王様の兄弟が王位を争つた様なことから見れば、其の相續法には何等、一定の標準と云ふものが無かつたと言はなければならぬ。斯かる往時の遺物たる王、司祭と將軍とを兼ねた様な王政と云ふものはマリウス、キケロの時代に於けるガリヤにあつては殆んど消滅してゐた。紀元前百年頃までに、かの *Ambigatus* は一人の傳説的な人物と化してゐたのである。今試みにケーザルの書に散見する王者を數へ舉げて見よう。

*Seguani* の王……………*Catamantaloedes* <sup>(十一)</sup>

*Suessiones* の王……………*Diviciacus*

並びに其の後繼者……………*Galba* <sup>(十一)</sup>

*Atrebatés* の王……………*Commius* <sup>(十三)</sup>

*Carnutes* の王……………*Tasgetius* <sup>(十四)</sup>

*Senones* の王……………*Moritasgus* <sup>(十五)</sup>

及び其の兄弟なる……………*Carvarinus*

*Eburones* の二人の王……………*Ambiorix*

……………*Catuvolens* <sup>(十六)</sup>

*Arverni* の王……………*Vergingetorix* <sup>(十七)</sup>

の十一名である。さて此の中 Ambiorix, Catuvolcus, Diviciacus, Galba, Commius の五名は何れも北方 Belgae の産であり、その一名 Diviciacus と Segunni の Catamantaloedes とはケーザルの到来前すでに其の位を去つてゐた。又前の一名 Commius と共に Tasgetius 及び Cavarinus は何れもケーザルの指命によつて立つた王者であつた。但し Tasgetius, Cavarinus と其の祖先は王位を持してゐたのである。Cavarinus の兄弟にあたる Moritasgus はケーザルのガリヤ遠征当初には王權を振つてゐた。Tasgetius は結局、政敵に暗殺され Cavarinus は其の Civitas に於て憎惡の的となつた。之等のもの他、Orgetorix, Casticus, Dumnorix, Celtillus は何れも王權を目指して事を起し破れたもの等である。之によつて見ればガリヤの政情は人心漸く王政を倦み共和政治への道に傾いてゐたもの如く思はれる。ただ政治的變遷の急激に行はれ得なかつた Belgae だけが王政の餘映を残してゐた。然も Eburones の王 Ambiorix が sua esse eiusmodi imperia ut non minus haberet iuris in se multitudo quam ipse in multitudinem (余の王權と申しても、余が人民に對し有すると劣らぬ權威を、人民は余に對し有つてある) (廿三)と言つた言葉からしても知られる様に其地に於てさへ王權は極めて制限されたものであつたらしい。最早それは傳統的、世襲的な位にあらずして選舉による王の形式を取つて來たのである。少くとも彼等王達は最大多數の同意によつて王權を勝ち得ると云ふ状態にあつた。王座の萬能は失はれて共和政

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三五)

體の裝飾品の如き現實を呈することになつた。他方、有力な貴族等は之等の空になつた王座をねらつて覇者たらんとし、民衆の同意を金力と武力とで征服しようと試みてゐた。期せずして同時代のローマが共和政治の假面を被りながら、見苦しい金權政治の泥濘に沈淪してゐた様に。然しながらガリヤも表面上だけはギリシヤ人によつて貴族政治と呼ばれた政體へ漸次、推移の過程を踏んだのである。斯かる變革が如何なる原因よりして、もたらされたかに就ては如何なる文書も口を緘してゐる。然しながら吾人は之を推定するに難くない。ガリヤに於ける王政も恐らくローマやアテネに於ける王政と同様の理由から減んで行つたものであらう。要するに王政は、ただ一人の人に餘りに多大の權力を付與することになるのであり、其を凡ての人々に普及しようと云ふ反對の試が起つて來るのは當然のことと言はなければならぬ。王を取圍んでゐた貴族達は、やがて其の臣服を厭ふことになつたのである。然して其の貴族達は王系を他の貴族と同じ系列の中に引き入れてしまふことに成功した。かくて王族は其の榮譽を喪失することも剝奪されることも無くして漸次、貴族の階級に同化されてしまつた。<sup>(廿四)</sup>然しながら此の變革は前述の如くガリヤを通じて全般的に行はれたものでは無い。ケーザルが遠征した當初 58 B.C. に於ても未だに王政は或地方に存在したのであり、就中政治的進歩の遅かつた邊境 *Belgae* の地にあつては、其はまだ相當に餘命を保つてゐたのである。けれども中部ガリヤ一體の地に於ては紀元前二世紀に於て殆んど完全に消滅しケーザルが *Principatus* と呼んだ長官制度が之に代つてゐた。

- (1) F. Livius : V, 34
- (11) ib., XXI, 31  
Polybius: III, 49
- (111) Strabon : IV, 2, (3)
- (111) Caesar : De Bello Gallico, V, 25
- (111) ib., VII, 31
- (111) ib., V, 54
- (111) ib., I, 3
- (111) ib., VI, 31
- (111) ib., II, 4
- (111) Arverni (Strabon : IV, 2, (3)), Senones (Caesar : De Bello Gallico, V, 54), Carnutes (ib., V, 25), Allobroges (T. I. v. : XXI, 31 ; Polybius : III, 49), Treveri (Tacitus : Hist., IV, 55) 等と並び其を以て之を出來る。
- (111) Caesar : De Bello Gallico, I, 3
- (111) ib., II, 4
- (111) ib., IV, 21
- (111) ib., V, 25
- (111) ib., V, 54
- (111) ib., VI, 31
- (111) ib., VII, 4

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)



(十八) *ib.*, VII, 31

(十九) *ib.*, I, 2—4

(#) *ib.*, I, 3

(#一) *ib.*, I, 3, 9, 18—20 ; V, 6—7

(#二) *ib.*, VII, 4

(#三) *ib.*, V, 27

(#四) *ib.*, I, 3 ; V, 25

*Tacitus : Historiae*, IV, 55

### D—Civitas の長官政

Celtae の Civitas 及び Belgae に於ける主要な Civitas は Caesar の遠征當初にあつては長官に支配  
(一)  
 されて居り Caesar は之を Principatus と稱し之等の支配者を Magistratus 若くは princeps Civitatis  
(二)  
 と呼んだ。之はギリシヤ人が *tyrannoi* と呼んだものである。(四) 前にも述べた通り、勿論之等のものは  
(五)  
 Pagus のものと全く混同されてはならぬ。

Civitas の Magistratus は本來、一人が原則であつた様に思はれるが其では一人のものに文武の全權  
(六)  
 を委ねた舊來の王政と等しく危険なものたらざるを得ない。それに又、政治的事情が複雑になつてくれ

ば、政治的君主が必ずしも軍事的司令官として當を得たものでは無いのである。タキッスが Germani に就いて語つた *Roges ex nobilitate, duces ex virtute sumunt* (君主は貴族から、司令官は伎倆から選舉する)<sup>(七)</sup>と云ふ言葉の眞理は彼等の間にも早くより萌してゐたものと推察される。ガリヤの政情を敍したるストラボの言葉に *Ἐν ἡγεμόνα ἡπόυτο κατ' ἐναυτοῦ το πάλαιον, ὡς εἰσὶν εἰς τὸνεμον εἰς ἴσην τοῦ πάλαιου ἀρεδείκουτο στρατηγός* (往時、彼等は一人の首領を年毎に戴き、同様、戦争の爲には一人の人が民衆の手により將帥に擧げられた)<sup>(八)</sup>とあるのより見ても當時のガリヤに於ける文武の大權は自ら分けられて居り、少くとも政治的 *Magistratus* からは軍事的指揮權が切離され、有事の際には其が他の別の有力者に委ねられる様になつてゐたものと考へられる。<sup>(九)</sup>かくて宛もアテネに *ἀρχων* と *στρατηγός* が居て文武の權を分擔してゐた様にガリヤに於ても之等二つの要素を區別して考へる様になつたのである。此の點から見て彼等の政治思想は相當に進展してきたものとせねばならぬ。

*Aedui* は年毎に選出される *Vergobretus* と呼ばれる長官を有してゐた。<sup>(十)</sup>この *Vergobretus* は *Aedui* の數多の *Pagus* の *Princeps* 等を統括し彼等の間にあつて生殺與奪の權を掌握してゐたのである。他面この *Vergobretus* を牽制する策として *Aedui* は其の任期を一年に規定し、又國境を出づることを禁じてゐた。之れ即ち一方に於て武力行使の禁制であり、他面に於て、他國の有力者と策動するを防止する目的であらう。<sup>(十一)</sup>又、其の選出には *Druid* 僧侶の力が參與してゐたのである。<sup>(十二)</sup>之等の制度は *antiquitus*

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(三九)

八三

(古くから)であつた所から見て<sup>(十三)</sup> Aedui は相當、以前に此の長官制度へと進展してゐたことが、うかがはれるのであり、實際凡ゆる點に於て Aedui は彼等のうち最も進歩的であり、又最もローマと相結んでゐた Civitas であつた。<sup>(十四)</sup> 然も彼等の間にあつてさへ其の慣習は時として恐ろしい破端に直面せねばならなかつたのである。<sup>(十五)</sup>

(一) Caesar, De Bello Gallico, I, 3 (Aedui); V, 3 (Trevveri)

(二) ib., I, 16, 19 (Aedui); VI, 20 (1 條); VII, 32, 33 (Aedui)

(三) ib., VII, 65 (Helvii); VIII, 12 (Remi)

(四) Strabon : IV, 4, (3)

(五) 本體 : 「A-Civitas の成因」の Pagnus」に於ける註 (十一) 参照

(六) Caesar : De Bello Gallico, I, 16; VII, 32 (Aedui)

ib., V, 3; VI, 8 (Trevveri)

(七) Tacitus : Germania, VII

(八) Strabon : IV, 4, (3)

(九) Caesar : De Bello Gallico, VII, 88 (Lanovicis); VIII, 12, (Remi)

(十) ib., I, 16

(十一) ib., VII, 33. Fustel de Coulanges 氏の文句を Vergobretus が武力から切離されてゐた事實を想像出来ると主張し更

に ib., VII, 37 に於ける記述が Aedui の Vergobretus なる Convicolitravis を差置ると Litavicus が兵を率ゐる事實

を證據として導き出さる。(Histoire des institutions politiques de l'ancienne France-la Gaule rom. p. 16 Note 2)

(十二) *ib.*, VII, 32—33, 39 (*Divitiensis* の勢力を見る)

(十三) *ib.*, VII, 32

(十四) *ib.*, VII, 33

(十五) *ib.*, VII, 32—33

### E—*Civitas* の長老會議

斯うした長官制度の下にあつて最も確固たる力と傳統とを有して嚴然たる政治的勢力の中心を形作つてゐたものは貴族階級である。前述の如く *Civitas* とは言つても其の構成分子なる *Pagus* の勢力が依然として衰へず其の上層にゐた彼等貴族は或は行動に訴へ、或は會議を召集して其の特權を保持してゐたのである。勿論、又 *Pagus* の首領はそれぞれに又一人の *Vergobretus* として *Pagus* の中に君臨した。其の地方の軍事警察權、民事裁判權を有してゐたものと思はれる。<sup>(1)</sup> 即ち *Civitas* にも *Magistratus* が居た様に各 *Pagus* にも、それぞれの *Magistratus* が居たのである。であるから一朝、重大な事項、例へば宣戰布告や平和締結と云ふ様な問題に觸れて來ると *Civitas* の長官も之等のものと談合してからで無ければ何事も決定し難かつたものであらうことは推察に難く無い。

然しながら *Civitas* には之とは別に公の會議としてケーザルが *Senatus* (長老會議) と呼んだものがあつた。この *Senatus* が如何にして成立せしものなるか不幸にして明瞭な記事を有し無いのであるが恐

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

らく其は *Civitas* の中の有力者より成立してゐたらしく思はれる。<sup>(三)</sup> 社會生活を左右する様な種々の問題の決定に參與し *Civitas* の *Magistratus* を助けて國事を議したものは疑ひも無く此の *Senatus* であつた。<sup>(三)</sup> 其れ故、勿論宣戰講和の決裁にもあづかつたのであり、宛もローマに於て當時、コンスル政治の背景となつて天下の政權を牛耳つてゐた *Senatus* があつたと同様にガリヤに於ても *Civitas* 政治の中樞機關を形成してゐたものは此の *Senatus* であつた。即ち *Civitas* の *Magistratus* の選出を議決した此の機關はガリヤに於ける此の貴族政治組織の意思を代表してゐたものと言つてよい。ただ之がローマの *Senatus* と異つてゐた點は、更に一層、民衆と結びついてゐたと云ふこと、と、更に一層、無力であつたと云ふことである。

平和な時期には寄り集つて合議すると言つても、一旦、戰禍が彼等を訪れて來れば *Senatus* は自ら陣頭に立つて勇敢に戦はねばならなかつた。ケーザルとの戦争の際、*Nervii* の六百人以上なる *Senatus* は激戦した擧句、たつた三名だけが生き残つたと傳へられてゐる。<sup>(六)</sup> 又 *Germani* の侵入をはばまんとした

*Aedui* の *Senatus* は其他の貴族、騎士等と共に殲滅させられたと記されてゐる。<sup>(七)</sup>

ケーザルはガリヤの各 *Civitas* に對する政策上、或は *Senatus* を膝下に召集し、<sup>(八)</sup> 或は罰として *Senatus* を剿絶せしめる様なことを行つた。<sup>(九)</sup> 然しガリヤは依然として動搖をまぬがれ無かつたのである。

*Aulerci Eburvices*, *Lexovii* 等はケーザルへの宣戰に反對した彼等の *Senatus* を躊躇なく殺戮してし

まつた。(十) 斯かる事情から推せばフェステル・ド・クローランジエも言ふ如くガリヤの政體はケーザルの遠征當初に於ても未だ其の原始社會の空氣を充分に脱してゐなかつたものと言はなければならぬ。(十一)

(一) Caesar : De Bello Gallico, I, 4

(二) ib., I, 31 ; VII, 32, 33, 55 (Aedui) ; III, 16 (Veneti) ; III, 17 (Auleri Eburovices 及び Lexovii) ; V, 54 (Sanones) ; II, 5 (Benni) ; II, 28 (Nervii) .

(三) ib., V, 54

(四) ib., III, 17

(五) ib., VII, 32

(六) ib., II, 28. 吾人が *Senatus* の人數に就いて Caesar の書中に見るは之のみである。勿論各 *Civitas* によつて其の人數には差異があつた事と推定される。

(七) ib., I, 31

(八) ib., II, 5 ; V, 54

(九) ib., III, 16

(十) ib., III, 17

(十一) Fustel de Coulanges : Histoire des institutions politiques de l'ancienne France—la gaule romaine p. 17

## F—Civitas の民衆

然しながら吾人は又、他面に於てガリヤが移動混亂の時代であり、權威の存續は確固たる政治組織によ

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三三)

るよりも寧ろ勇敢なる兵卒の武器によるべき事態にあつたことを忘れてはならない。何人もが民衆的行動を取らねばならぬ時代、そして其の民衆が指導者たる英雄を待望する時代——そう云ふ時代であつた。内外、多事多難であり有爲な人士に多くの望みが懸けられた當時のガリヤにあつては地位、階級によつて凡てが左右される様なことは無かつた。實際的に能力あるものが最も望ましかつたのであつた。(一) *Aduni* の長官の位に關する内訌に於て *Eporedorix* と相拮抗して譲らなかつた *Vridomarus* は元來、賤しき生れの人であつたのである。(二) 斯うした社會にあつては時として民衆が一定の方向を得ると俄に意外の力を示すことがある。

ガリヤに於ける *nam plebes paene servorum habetur loco, quae nihil audet per se, nullo adhibetur consilio. Plerique, cum aut aere alieno aut magnitudine tributorum aut iniuria potentiorum premuntur, sese in servitum dicant nobilibus : in hos eadem omnia sunt iura, quae dominis in servos.* (民衆と云へば彼等は奴隸の如くあしらはれ、自ら何事を爲すでも無く、會議に參與することも無かつたのである。彼等の大部分は借財に追はれるか重い負擔に壓せられ、或は又、強力なものに虐げられて貴族達に隸屬してゐた。貴族は實際、主人が奴隸に對すると變らぬ權利を彼等に對して振まはしてゐた。(三) )のである。斯かる状態にあつた民衆は彼等を引率する貴族の手先となつて一つの動亂の要素を形成してゐたことは言を俟たぬ。彼等の隱然たる勢力は、やがて其を利用し得る立場にあつた貴族等の看過し得ざる要

素となつたもので、貴族等は互に彼等を糾合してガリヤの政情の變遷の鍵を握つてゐたのである。即ち各貴族は或は兵を養ひ、或は隣國の有力者と通じ、或は結婚政策により、或は數多の *Cientes* を手下にし、或は負債に悩む貧窮の人々を買収し、或は浮浪人をかり集める等、凡ゆる手段を講じて自己の勢力を擴張するに努めてゐた。<sup>(四)</sup>斯うした政情は到底、安泰であり得なかつた。之等の權力者達は互に他を牽制しながらも自らは折さへあれば他を抽引じて天下の覇者たらんものと、ゆるみなく劃策してゐた。中には其が爲には外來蠻族の力を借りてまで之を行はんと試みてゐるものもあつた。<sup>(五)</sup>如何にもして *Pisistratus* たらんとする之等の人々の集合に過ぎざるガリヤの貴族政治は所詮、絶え間なき動搖を感せねばならなかつたのである。そして此の動搖の上層に浮んでゐたものはケーザルが *equites* (騎士階級) と呼んだ彼等貴族と *Druid* 僧侶とであつた。<sup>(六)</sup>

ケーザルが *Aedui* の分裂を語つて *divisum senatum, divisum populum, suas cuiusque eorum clientelas* (彼等の *Cientes* をそれぞれ隨へて *Senatus* も分れ *Populus* も分れた)<sup>(七)</sup> と記してゐる中の此の *Populus* なる語は *Civitas* に於ける之等貴族階級を示すものであるとカミイユ・ジュリヤンは主張してゐる。<sup>(八)</sup> 恐らく之等の貴族は平時にあつては法律を遵守し、*Civitas* の *Magistratus* に萬事を委ね、*Magistratus* の選出なども、之を *Senatus* に依して參與しなかつたものと思はれる。けれども *Magistratus* に対して不満があつたり、<sup>(九)</sup> *Senatus* の處置に不快なことがあつたりすると、<sup>(十)</sup> 彼等は部下と共に之にあたつ

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三五)



たのである。

タキッスが Germani の風習として述べた De minoribus rebus principes consultant, de majoribus omnes (比較的重大でない事件に關しては王侯のみが協議し、重要事件に關しては總てが共に協議する) (十一)

と云ふ言葉は其のまま此の當時のガリヤにもあてはまる。即ち戦時にあつては彼等貴族も一般民衆も

Concilium armatum (十二) に参加し一致して國難の打解に處するのが常であり、此の場合、彼等は日を指し、

場所を定めて Concilium を開いた。之はガリヤに於ける戦闘開始の第一行動であつたのであり、凡て成

人たるものは武器を取つて之に參すべきことが一般法により (lege communi) 規定されており最後に馳

せ參じた様なものは公衆の面前で凡ゆる苦痛を加へられた上、殺されることになつてゐた程である。次

で細密なる人員點呼があり其が圖表にせられた。前述の如く吾人は Helvetii 戦役の結果ケーザルにより

発見されたと云ふ實に細密な圖表を見ることが出来る。(十四) 次で首領は戦争のあるべきこと、敵とすべきも

のの名前、爲すべき行軍の旅程、等を指示したものと思はれる。(十五) 武將の選定は Senatus によらず、斯の

如く集合した民衆の手によつて (suo rei mandatis) なされたものらしい。(十六) かくて全ガリヤがローマに對

抗して立つた時、彼等の間から選舉によつて Veringetorix が總司令官に任命されたのであつた。(十七) 自ら

好む所の將帥の許に戦はんとするは民衆の不變的特權である。勢力のあつた叔父に棄てられ、諸々の

Princeps に反目され Gergovia の oppidum から追放された Veringetorix を擁立して大業を成さしめ

たものは乞食や浪人等であつた。<sup>(十八)</sup>かくて動亂戦禍に安まることの無かつたガリヤに於ては民衆の力も亦一つの看過し得ぬ政治的要素であつたのである。

(一) Caesar : De Bello Gallico, II, 1

(二) ib., VII, 33

(三) ib., VI, 13

(四) ib., I, 3, 4, 13 ; II, 1 ; VI, 11, 13, 15 ; VII, 4, 40, 64

Fustel de Coulanges : Histoire des institutions politiques de l'ancienne France—la gaule romaine, pp. 37—38

(五) Caesar : De Bello Gallico, I, 31, 32 ; VI, 12

(六) ib., VI, 13—15

(七) ib., VII, 32

(八) C. Juliam : Histoire de la Gaule, II, P. 51

(九) Caesar : De Bello Gallico, VII, 32

(十) ib., III, 17

(十一) Tacitus : Germania, XI

(十二) Caesar : De Bello Gallico, I, 4 ; V, 56

F. Livius, XXI, 20

(十三) Caesar : De Bello Gallico, V, 56

(十四) ib., I, 29 此の表によれば、各々名前を擧げて、其の本國を出でたるもの數、武装し得たるもの數、なほ又、子供、老人、女子等が別々に記載せられてあつたのである。

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(十五) *ib.*, V, 56

(十六) *Scribon* : IV, 4, (3)

(十七) *Caesar* : *De Bello Gallico*, VII, 63

(十八) *ib.*, VII, 4

### G—Civitas の行政

けれども、かかる混亂時代を通じてガリヤは次第に其の行政機關を統制して來たのである。各 *Civitas* の分野も *Germani* 侵入の餘波を受けぬ限り、大體、固定されてゐたらしく、之は分野の比較的明かな *Pagus* を構成單位とする *Civitas* にとつて別に不思議は無からう。それでも領地争ひが全く無かつたわけではない。<sup>(一)</sup>

彼等は公の租税制度を有してゐたのであり、ケーザルは別に其に就て明言を下してゐないが大體に於て其は直接税と間接税とに分けられる様である。直接税には *tributa* と呼ばれるものがあり、之は當時すでに過重の傾きがあつたものの如く推察される。<sup>(二)</sup> *Druid* 僧侶を除いて皆その負擔に與つたものらし

い。<sup>(三)</sup> 此の他、兵役は勿論のこと、産物の納入、賦役、種々の個人的義務は當時の情勢から推して、まぬがれなかつた事と思はれる。同時にケーザルにより *Portoria*, *Vectigalia* <sup>(四)</sup> と呼ばれた間接税制も彼等の間に行はれ、河川に沿ひ、道路に沿つて通行税即ち關税が施かれてゐた。例へば *Alpes* 山中の通行には

多大の費用が、かかつたことがローマの商人等を苦しめてゐた事實も見あたるし、<sup>(五)</sup> 通關税のことから Arar (Sa<sup>no</sup>) 河の所有權が争ひの的となつた話もあり、<sup>(六)</sup> 又 Massilia 人は Rhodanus 河を上下する船から通行税を徴收することによつて莫大な富を加へ得たのである。<sup>(七)</sup> 輸出入税として Britania と交易される商品が課税せられてゐた事實もケーザルの書中に見える。<sup>(八)</sup> 收税請負は古くより行はれ、地方貴族、豪族に活躍の分野を提供してゐたらしい。<sup>(九)</sup> 之等の租税が如何に使用されたものか明かにするすべもない。

Magistratus と其を支持する Senatus とは Civitas を代表して之を護つた。Civitas に對する罪、叛逆、陰謀が斷せられたのは之等のもの名に於てであつた。<sup>(十)</sup> 神に對する不敬罪、窃盜罪、等も亦、罰せられたのである。<sup>(十一)</sup> Magistratus はよく目立つ Xpυσσοτάτορος (金欄の) 衣服を纏うてゐた。<sup>(十二)</sup> として武装せる *υπηρέτης* (侍從) を隨へてゐた。<sup>(十三)</sup> 然しながら實際に於て公私を問はず大抵の紛争が解決されたのは Druid 僧侶の手によつてであつた。<sup>(十四)</sup> 殺人罪、相續争、境界争が裁決され、功罪が定められた。之に従はねば彼等の社會に於て *poena gravissima* (最も重き罰) とせられた宗教的破門を受けねばならなかつた。そして宗教的に絶交されることは全社會から埋り去られることに他ならなかつた。即ち *quibus ita est interdictum, hi numero impiorum ac sceleratorum habentur, his omnes decedunt, aditum sermonemque defugunt, ne quid ex contagione incommodi accipiant, neque his petentibus ius redditur neque*

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三九)

honos ullus communicatur. (斯くの如くして絶交せられたるものは不敬なるもの罪重きものの一人として考へられ、凡てのものは之より離れ、之に觸るることにより害を受けざらんがため、之に接近し語り合ふことを拒んだ。之が求むるとも正義は與へられず、如何なる名譽も之にあづからしめなかつた)<sup>(十五)</sup>のであつた。

之等ガリヤの Civitas を規律あり防備ある古代の都市、例へばソロンのアテネとか十二表法時代のローマに比することは避けねばならぬが、之等を以て、ただ恐怖と漠然たる因襲によつてのみ規約せらるる野蠻人の集團なりとすることは不正であり且つ不當である。成文法によつて律せられ嚴格な長官や世話好きの司祭によつて緊束せられてゐたギリシャ、ローマの諸都市に比すれば、勿論彼等の生活は不安定であり、事業も幼稚なものであつた。もつと放縱であり、更に一層、無形式であつた。然しながら其の大部分のものは Lex scripta であらば Lex non scripta であらば、時代を追つて忠實に傳承された憲法を有してゐたのである。<sup>(十六)</sup> 即ち彼等の所謂 Lex sancta (神聖なる法律) を有してゐたのである。<sup>(十七)</sup> 長官、政治區劃、法律、慣習と云ふ様な規律ある組織的國家の要素はすでに存在してゐたのであつた。司法は長官により賢明な方法で遂行された。即ち被告には出廷期日が明示され、訊問が先づ行はれ、然る後、裁決が取られた。裁判は公の場所、公衆の面前で行はれた。<sup>(十九)</sup> 罪によつて刑罰も異つてゐた。或ものは體刑を加へられ、或ものは財産刑を受けた。<sup>(廿)</sup> 公敵の財産は沒收されるのが常であつた。<sup>(廿一)</sup> 陰謀、叛逆、軍事的

行動の失策、姦通は火刑に處せられた。<sup>(廿二)</sup> 其の他、窃盜者や殺人罪を犯せる外國人も死刑に處せられた。<sup>(廿三)</sup>

*Concilium armatum* に遅れて來たもの、聖物を盗んだものは皆、死刑を被つた。<sup>(廿四)</sup> 死刑は見せしめのために公衆の面前で行はれた。そして皆、苦しみぬいた擧句に絶命する様に、こしらへられた火刑であつた。實際、之等の罪惡は當時の *Civitas* に於ける安寧秩序と名譽とを蔑にする憎んでも餘りある重大な禍であつたのであらう。

之より軽い體刑としてケーザルの書中に見ゆるものは眼をくりぬく罰や、耳を切り取る罰である。<sup>(廿五)</sup> あれ

程、勢力のあつた *Helvetii* の *Orgetorix* を慣習によるとの名目で、先づ縛つて裁判の場所に連れ出した所を見ると彼等の間にも、すでに拘留處分や裁判方法が相當に確立してゐたものと推察される。嚴格

な法律は屢々、民衆に犯されたが、一々嚴密に罰せられてゐたことと思はれる。訴訟は *Concilium* の席上でなされた。もし何人が話手を阻止したり、妨害したりする様なことがあると *Magistratus* の武

装せる待従は之に向つて三度戒告し、三度目の戒告には劍を振つて其の者の外衣 (*sagrus*) の襜を切り落したと言はれてゐる。<sup>(廿七)</sup> 又、進歩した秩序ある *Civitas* では法律により次の如く規定してゐた。 *si quis*

*quid de re publica a finitimis rumore aut fama accipit, uti ad magistratum deferat neve cum quo alio communicet* (誰人と雖も、流言によるか報告によるかして隣國のものから公に關する何事かを聞知したる場合は必ず *Magistratus* に之を報知し他にもらさざること)<sup>(廿八)</sup> である。言ふまでも無く之は價値な

き流言蜚語により社會の秩序が惑亂されることを防止せるものである。つまり *Magistratus* は必要に應じて或ものは之を胸に貯へ、或ものは之を公表して社會に訴へたものであつた。

行政審議は *Civitas* の權威者等によりなされたが規定の *Concilium* を超えて之を議することは許されなかつた。<sup>(廿九)</sup> この規定は陰謀を防止する上に於て誠に優秀な純粹の方策であり、事實、之は殆んど陰謀の巢窟となることが出来なかつたのである。

*Orgetorix* の亂<sup>(卅)</sup>を見ても *Civitas* が決して武力や財力のみによつて左右されず、深き傳統に守られた權威をも有してゐたことが推測し得るのである。

(一) *Caesar* : *De Bello Gallico*, VI, 13

(二) *ib.*, VI, 13

(三) *ib.*, VI, 14. *C. Jullian se neque tributa una cum reliquis pendunt* を「他のものと同様には支拂はなかつた」と解し *Strabon* の *ἡ δὲ οὐρανὸν ἀστροί*, (IV, 2, (1)) の句などを参照し *Druid* 僧侶と雖も、この租税はまぬがれなかつたのだと主張し *Plinius* (*Histoire de la Gaule*, II, p. 55) 之は首肯し兼ねる。

(四) *ib.*, I, 18

(五) *ib.*, III, 1

(六) *Strabon* : IV, 3, (2)

(七) *ib.*, IV, 1, (8)

(八) *Caesar*: *De Bello Gallico*, III, 8

- (九) *ib.*, I, 18
- (十) *ib.*, I, 4 ; V, 54, 56 ; VII, 4
- (十一) *ib.*, VI, 16, 17
- (十二) Strabon : IV, 4, (5)
- (十三) *ib.*, IV, 4, (3)
- (十四) *ib.*, IV, 4, (4)
- (十五) Caesar : De Bello Gallico, VI, 13
- (十六) *ib.*, II, 3 ; VII, 32 (antiquitus), 33, 76
- (十七) *ib.*, VI, 20
- (十八) *ib.*, I, 4 (moribus suis)
- (十九) *ib.*, I, 4
- (廿) *ib.*, I, 4 ; V, 56 ; VII, 4, 43
- (廿一) *ib.*, V, 56 ; VII, 43
- (廿二) *ib.*, I, 4 ; VI, 19 ; VII, 4
- (廿三) *ib.*, IV, 15 ; VI, 16
- (廿四) *ib.*, V, 56 ; VI, 17
- (廿五) *ib.*, VII, 4
- (廿六) *ib.*, I, 4
- (廿七) Strabon : IV, 4, (3) 恐らく其者は席にゐたまらなくなつて姿を隠したのでもらう。

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的气運の變遷に就て (近山)



(廿八) Caesar : De Bello Gallico, VI, 20

(廿九) ib., VI, 20

(卅) ib., I, 4

### H—Civitas の都市と城塞

Civitas の中には通常一つの首都があり、<sup>(一)</sup> 數個の都が之を取圍み、<sup>(二)</sup> 又無數の城砦が各所に築かれてあつた。<sup>(三)</sup> 然しながら古代都市が凡て然うであつた様に都市と雖も城塞の大きなものであつて、之等の

分離は意味の上からの事でケーザルは之等を何れも *Oppidum* 或は *Urbs* なる文字で示してゐる。それ

故ケーザルの書に現はれて來る *Oppidum* と云ひ *Urbs* と云ひ皆、<sup>(四)</sup> 常時、住民を有するものであり、<sup>(五)</sup> 戰

時にのみ使用された軍事用の城塞では無かつたのである。<sup>(六)</sup> *Vesontio*, *Noviodunum*, *Lutetia*, *Bibracte*,

<sup>(七)</sup> *Alesia*, *Vellannodunum* 等、<sup>(八)</sup> 何れも城塞とは云へ數多の人口を有してゐた。<sup>(九)</sup> *Urbs* と *Oppidum* との間に

は其の内容に於て差があつたとは考へられぬ。何となればケーザルは *Gergovia* や *Alesia* や *Avaricum*

に對して或は *Oppidum* と云ひ或は *Urbs* と云つてゐるのである。<sup>(十)</sup> *Oppidum* の住民 *Oppidani* は多く

ローマの商人を相手に生活してゐた商人等や工人等であつた様に見える。其れ故ガリヤ戰爭の際、ガリ

ヤ人に交つて *Genabum* や *Cabillonum* にまで進展してゐたローマの商人等は迫害を受けることになつ

たのであらう。

又ケーザルは屢々 Castellum (城砦) と云ふ字を使つてゐる。<sup>(十七)</sup> 例へば Helvetii 戦役の際にケーザルは敵の襲撃に備へる爲に Lemanus 湖から Jura 山脈にかけて防壁を築き守備兵を配置して其の Castellum を固めた。<sup>(十八)</sup> 同じ様なことが Axona 河の戦役にも、<sup>(十九)</sup> Aduatuci 戦役にも、<sup>(廿)</sup> 又かの Alesia 戦役<sup>(廿一)</sup>に於ても見られるのである。又ケーザルが陣營地とした Aduatuca を斯く呼んでゐる事實等から推して之は前の二者よりも遙かに軍備上の要素が重きをなしてゐたものなのであらうかと思はれる。

なほ Civitas を構成する各 Pagus の領域中には幾多の Vici<sup>(廿二)</sup> (村落)、Aedificium<sup>(廿三)</sup> (家宅) が含まれてゐたのである。

之等のものが一つの Civitas に何れ程の數で存在したかは、Civitas の大小によると云ふよりも、寧ろ其の文化の高低により、又商業交通の良否によつて著しき差を生じたことであらう。ガリヤに於て大きな Civitas の一つであつた Helvetii は十二個の都市と四百餘の村落を有してゐた。又 Bibrigis<sup>(廿四)</sup> は全ガリヤで最も美しい都と呼ばれた Avaricum を圍んで廿有餘の都市があつた。<sup>(廿五)</sup>

彼等の Concilium は主として Civitas の中心地で開かれた。Civitas 生成の原因が軍事、經濟上の要求にあつた關係上 Civitas の中心地即ち Civitas の市場であり、聖所であつた地域は、Civitas の中央に、交通の要點をなす然も要害な地に設けられたものと思はれる。そして其は恐らく同時に市場であ

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(二四五)

り、要塞であり、物質的、軍事的、精神的中心地であつたのだと思はれる。Arverni の Gergovia にせよ、Bituriges の Avaricum にせよ、Aedui の Bibracte にせよ、Sequani の Vesontio にせよ、何れ一つとして以上の要素を充分にそなへずして存在したものは見あたらぬのである。

有事の際 Civitas の人々は凡てを棄てて此所に集り運命の捌きを待つた。Areverni は Gergovia に Bituriges は Avaricum に籠城奮戦したのであり、叛逆せる Senones の主導者 Aeco はケーザル及びプローマ軍の到來を知るや先づ各 Oppidum に兵を集中せしめて之に備へることを忘れなかつた。此處は彼等にとつて神聖な最後のものとなつてゐたのであらう。其れ故、之は一面に於て Civitas の誇りであり、其の大切なる象徴でもあつた。かくてこそ 52 B. C. Avaricum 燒棄の計畫が立てられた時 Bituriges のもの等は全ガリヤ人の足下に身を投げ出して、このガリヤに於て最も美しき都、Civitas の避難所であり裝飾でもあつた此の都に自分等が手づから火をかける様な破目にならぬ様、懇願したのであつた。この都は殆んど周圍を沼澤河川で取巻かれ、ただ一本の極めて細い路が外部に通じてゐるのみであつたから、彼等は自ら其の地の利によつて容易に之を守り得べしと主張した。Veringetorix は最初、之に反對したが其の切なる願望に動かされて其の計畫を棄てねばならなかつたのであつた。やがて來るべき此の Avaricum の陥落が如何にガリヤ軍の志氣にとつて不利に展開したかは注目に値すると思ふ。Veringetorix は其時に至つて初めて彼等に彼の言が正しかつたことを説き Bituriges の無思慮を歎いたのであ

つた。(卅三)

タキッスは Nullas Germanorum populis urbes habitari, satis notum est (Germani 諸部族が都市に住

(卅四)

んでゐないことは周知の事實である)と言つてゐるがケーザル時代のガリヤに於ては危急存亡に際しても、なほ且つ彼等は彼等の都市に對する愛着を棄て去ることが出來ず、英雄 Vercingetorix をして慨歎せしめたことを思へば、兩民族の文化の間に多大の懸隔があつたことをうかがひ得るのである。事實ケーザルの書中に見ゆる Germani はガリヤの耕地と文化と資源とを渴望する homines feri ac barbari (凶暴野蠻な人々)であり、neque enim conferendum esse Gallicum cum Germanorum agro, neque hanc consuetudinem victus cum illa comparandam (誠にガリヤの土地は Germani の地とは較ぶものにならず、其の生活状態も彼我に於て對照とならなかつた)のである。(卅五)

(一) Caesar : De Bello Gallico, I, 23 (Bibracte) ; VII, 4 (Gergovia) ; VII, 13 (Avaricum)

(二) ib., III, 14 ; VI, 4 ; VII, 15

(三) ib., II, 29 ; III, 1

(四) ib., I, 38

(五) ib., VII, 55

(六) ib., VII, 57

(七) ib., VII, 55

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)

(三六)

101

- (八) ib., VII, 68
- (九) ib., VII, 11
- (十) ib., VII, 4, 36
- (十一) ib., VII, 68
- (十二) ib., VII, 13, 15
- (十三) ib., II, 33 ; VII, 12, 58
- (十四) ib., IV, 5
- (十五) ib., VII, 3
- (十六) ib., VII, 42
- (十七) ib., II, 29 ; III, 1
- (十八) ib., I, 8
- (十九) ib., II, 8
- (廿) ib., II, 30, 33
- (廿一) ib., VII, 69
- (廿二) ib., VI, 32
- (廿三) ib., I, 5, 11, 28 ; III, 1, 29 ; VI, 6, 43 ; VII, 17
- (廿四) ib., I, 5 ; III, 29 ; VI, 6, 30, 43 ; VII, 14, 17
- (廿五) ib., I, 5
- (廿六) ib., VII, 15

- (# 七) ib., VII, 4 Strabon : IV, 2, (3)  
 (# 八) ib., VII, 15  
 (# 九) ib., I, 23  
 (#) ib., I, 38  
 (# 一) ib., VI, 4  
 (# 二) ib., VII, 15  
 (# 三) ib., VII, 29  
 (# 四) Tacitus : Germania, XVI  
 (# 五) Caesar : De Bello Gallico, I, 31

## 結 論

### A—Civitas と Civitas との関係

ガリヤに於ける之等 Civitas が如何なる相互關係にあつたものであるか、Civitas と Civitas との間の關係を檢討して見よう。前述の如くケーザルの Commentarii の中には之等の關係を表す言葉として socii (ii) (職合國)、Civitas (被護民) の二つが見出されるのである。

Socii は主として軍事上の目的から生れた單なる聯合の様に考へられるが Civitas に就ては相當複雑

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(四六)

一〇三

な關係があつたものらしく被護民とは云つても其の程度に至つては互に千差萬別であつたことと推察される。今 *Commentarii* の中に見えるものを拾ひ集めて見れば凡そ次の如くである。Aedui 人 *Diviciacus* の言葉によれば *Bellovaeci* は *omni tempore in fide atque amicitia civitatis Aeduae fuisse* (常に Aedui の國家の保護と友誼とを受けてゐたもの)<sup>(三)</sup> であり、53 B. C. に *Senones* がケーザルに降服を求めた時、彼等は *Per Aeduos, quorum antiquitas erat in fide civitas* (昔から彼等の國が保護を受けてゐた Aedui を介して)<sup>(四)</sup> 申込んだのであり、その翌年 *Vercingetorix* が叛旗をひるがへした時、*Bituriges* は *ad Aeduos, quorum erant in fide* (彼等が保護を受けてゐた Aedui に) 使節を送つて救助を求めたのであつた。<sup>(五)</sup> 之等より推すに *in fide* なる語は決して單なる同盟を意味するものでは無い。 *Bellovaeci* が降服した折、ケーザルは *Diviciacus* 及び Aedui に對する尊敬から、之を *in fidem recepturum* (保護してやる) ことにしたのであり、<sup>(六)</sup> 要するに *Bellovaeci* も *Bituriges* も *Senones* も Aedui の *Veteres Clientes* (古き被護民)<sup>(七)</sup> であつたものであらうかと思はれるのである。又 53 B. C. に *Carnutes* がケーザルの認容を得るために *usi deprecatoribus Remis, quorum erant in Clientela* (彼等が其の被護民たりし *Remi* の仲介を用ひて) 使節と人質とをケーザルの許に送つて來たと云ふ記事と前の數句とを照合して見れば *in Clientela* なる語は *in fide* と云ふ語と内容に於て大差なき事が推測されるのである。又 *Nervii* の諸々の *clientes* は *omnes sub eorum imperio sunt* (何れも彼等 *Nervii* の支配下にあつた)<sup>(九)</sup>

のであり、又ケーザルの到來によつて新に Aedui の Clientes となつたもの等は其の結果 *aequiore imperio*  
 (より良き支配) を受ける様になつたと言はれるところより見れば *sub imperio esse* なる語も亦、被  
 護民に對し用ひられてゐるのである。之によつて *Clientela* なる語を察すれば其の内容は相當に雜多な  
 ものであつたと想像しなければならぬ。Clientes を有つ Civitas は恐らく彼等に對して出来るだけの  
 權威を振つてゐたであらうし、同じ Civitas を主に戴いてゐても或 Clientes は他の Clientes に比して  
 割合に自力を有つてゐた様なことがあつたものと推測される。前述の如く Bellovaci と Senones と  
 Bituriges は疑ひも無く、或意味に於て Aedui の Clientes であり、又 Carnutes と Remi の Clientes  
 であつたが、彼等は決して其の imperium (支配) 下にあつたわけでは無かつた。そればかりで Aedui と  
 Remi がローマに服屬してゐたにかかはらず Senones と Carnutes は叛逆したのである。(十一)  
 Clientes として Veringetorix に組した Segusiavi, Ambivareti, Auleri Brannovices, Blannovii 等は彼  
 の許に走つて其の imperium (支配) 下に立つたのであり、Arverni に於ても Eleuteti, Cadurei, Gabali,  
 Vellavi, の如き Clientes は同様 Veringetorix に走つたものであつた。(十二) 之等のものは或點から見れば  
 其の主を Civitas から個人に移動したものと見なければならぬ。(十三)

兎も角 Clientes となつたもの等は軍事上の奉仕は勿論のこと、Eburones の如きは其の主 Aduatuci に  
 對して納貢してゐた。(十四) 然し内政は言ふまでもなく各 Civitas とも獨立に行つたものであり、主として對  
 (十五)



外的な軍事關係から生れた *Cientes* の制度に於ける *imperium* も各 *Civitas* の榮枯盛衰によつて自由に移動したものであつたらうと思はれる。又對内的政策の上から *Cientes* となることもあつた。例へば *Britannia* が征服されもせぬ對岸の *Suessiones* に對して其の王 *Diviciacus* の *imperium* に服したの(十六)は明かに政治的內訌の發生を壓服する手段からであつたと思はれる。54 B. C. ケーザルが *Britannia* に渡つた時、彼等は *Catuvellannus* と *Mandubracius* とによつて率ゐられる二派に分裂してゐた事實も之(十七)に傍證を與へてくれるものであらう。彼等は斯く *Cientes* たることによつて自己の存立を圖つたものであるが *Suessiones* の如きは *Remi* に從屬する(十八)ことにより對外的には *iure et isdem legibus utantur, unum imperium unumque magistratum cum ipsis habere* (同一の權利、同一の法律を遵守し、一つの支配、一つの長官を戴く)わけになつたのである。(十八)

之等の他ケーザルは又其の書の中に於て *fratres consanguineosque* (友邦にして同族)なる語を *Remi* と *Suessiones* との間(十九)に用ひ *Necessarii et Consanguinei* (近親にして同族)なる語を *Aedui* と *Ambarri* との間(二十)に用ひ、之等の語は彼等との關係が極めて親密なものであつたことを示すに止るものと考へられる。何となればケーザルは同じ *fratres consanguineosque* (友邦にして同族)なる語を *Aedui* とローマ人との間にも用ひてゐるのである。(二十一)アウグスツス時代なら兎も角、ケーザル遠征前に於ける *Aedui* がローマ人と此の字義通りの關係にあつたものとは思はれない。言ふまでも無く之は彼等相互の

間が極めて親密であつたことを物語る言葉なのである。

(一) 序論 A、政情概観参照

(二) 之は勿論 Civitas としとの關係である同書 I, 4; VI, 15 等に出づる Clientes とは區別されねばならぬ。後者は個人に従屬するものなり Ambactii (VI, 15) 及 Soldarii (III, 22) と同質のものなり。此處では問題とすべからざるものである。

(三) Caesar : De Bello Gallico, II, 14

(四) ib., VI, 4, Bohn 及び Macevitt の共譯 (Bohn 譯) とは之を through the Aedui, whose state was from Ancient times under the protection of Rome と譯してゐるが之は明かに誤譯である。

(五) ib., VII, 5

(六) ib., II, 15

(七) ib., VI, 12

(八) ib., VI, 4

(九) ib., V, 39

(十) ib., VI, 12

(十一) ib., V, 54, 56 ; VI, 2—5, 44

(十二) ib., VII, 75

(十三) ib., VII, 75

(十四) ib., I, 31 etc.

(十五) ib., V, 27

(十六) ib., II, 4

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(二三)

107

(十七) *ib.*, V, II, 22(十八) *ib.*, II, 3(十九) *ib.*, II, 3(廿) *ib.*, I, 13(廿一) *ib.*, I, 33

## B—政 情 概 觀 (下)

其の昔、勇名をほしいままにしてゐたガリヤの人々はギリシヤ、ローマの文化の流に直面して其の粗暴な性格をたわめられてゐた。彼等は野蠻人の強さを失つて然も未だ文明の強さを獲得してゐなかつた。兇暴そのものの如き Germani を北方にむかへて彼等には備ふべき何一つの方法もなかつたのであ

(1) *Ac fuit antea tempus, cum Germanos Galli virtute superarent, ulto bella inferrent, propter hon-*

*inum multitudinem agrisque incipiam trans Rhenum colonias mitterent* (會てはガリヤ人が武勇に於て

Germani に勝り、其の地に戦を挑みかけ、人口過剰と耕地不足のために Rhenus を渡り殖民地を築いた時代もあつた。) 然し彼等はやがて文化の力に撓められて行つた。そして *Paulatim adsuetafacti superari*

*multisque victi proeliis ne se quidem ipsi cum illis virtute comparant* (次第に敗北に慣れて多くの戦

闘に打敗された擧句、彼等は武勇に於て Germani に拮抗することゝへ出来なくなつた<sup>(二)</sup>)。彼等が兇暴よ

り救はれるべき唯一の道はローマの權威に跪くことであつた。然も彼等の多くは傳統的自尊心からローマの統治下に服することを潔しとしなかつたのである。動亂のガリヤは更に又、目前に迫りつつある此の苦しみデレンマに悩んだのであつた。更に彼等は極めて黨派的であつた。大國も小國もすべて黨派心に漲つてゐた。<sup>(三)</sup> 度重なる内訌と分裂とは到底、彼等をして一致して外敵にあたらしめることを許さなかつたのである。所詮、彼等は大勢を二分せねばならなかつた。斯くてケーザルがガリヤ征討に向つた當初に於ては全ガリヤが大體、二つつの黨派に分たれてゐたのである。一は首領に Aedui, Romi を、他は Arverni, Seguni を戴き、前者はローマに款を通じ、後者は Germani と組してゐた。<sup>(四)</sup> フヌステル・ド・クランジュはガリヤに於ける親ローマ派と反ローマ派とを彼等の要望せる政治組織によつて之を區別することが出来るとなし、*quod in Gallia a potentioribus atque eis qui ad conducendos homines facultates habebant vulgo regna occupabantur, qui minus facile eam rem imperio nostro consequi poterant* (凡そガリヤに於ては力あるもの、人々を傭ふ能力あるものによつて玉座が占められるのであるが、この事はローマの権力下では求めても至難なものであらうと云ふ事情)<sup>(五)</sup> を物語つてゐるケーザルの言葉は明かにローマの敵が何者たるかを識別させるものである、即ちガリヤに於ける *Pisistatus* たらんとするもの等と共に感動してか買収されてか兎も角、其の手下となる群衆は言ふまでもなく反ローマ派であつたと断定してゐる。そして之に對し親ローマ派はローマの政體に類似の *Senatus* 政治を中心とする

連中であつたことを推定し、實際ローマが凡ゆる他の地方で採用した施政方針は此の *Senatus* 政治の敷衍にあつたものであると説いてゐる。<sup>(六)</sup> 即ち前者が王政主義的性質を有する専制政治を所望してゐたに對し、後者は共和主義的性質を有する貴族政治を奉戴してゐるもの等であつた。そしてケーザルが *Cominius*, *Tasgetius*, *Cavarinus* 等の王者を起したことは一時の政策上からの手段であつて、此の大きな政策傾向とは何等の矛盾を來すものではないと語つてゐる。<sup>(七)</sup> 此の説には否むことの出來ぬ一面の眞理がある様に思はれる。誠に *Dumnorix* と云ひ *Vercingetorix* と云ひ王權を目指したものは皆反ローマ派に相違ない。<sup>(八)</sup> そして又、大勢がさう傾いてゐたことも事實である。けれども其は要するに大勢なのであつて、反ローマ派が必ずしも皆専制政治への道を歩んでゐたものと斷することは出來ない。

抑々ケーザルのガリヤに對する政策に就てはケーザル自身が無言である以上、何も具體的の事は分らないのである。*Commentarii* の内容はガリヤに對してケーザルが高等政策に終始するものである事を感ぜしめる。ケーザルにとつては共和主義たると王政主義たるとを問はず味方は味方であつた様に思はれる。ケーザルの好誼をたのみ、彼の助力を借りて競争者をだしぬかうとする者等、彼の究極の勝利を豫見するに敏であつた者達は時と所とを問はず彼の許に集つて來たのである。*Giuglielmo Ferrero* や *カミイユ・ジュリヤン* はケーザルが *Cominius*, *Tasgetius*, *Cavarinus* 等を王位に即かした事を以てケーザルのガリヤに對する政策の重大な轉換であるかの如く見てゐるが<sup>(九)</sup> ケーザルが *Cominius* を王位に推した

のは一つの買収政策と見るべく、Tasgetius, Cavarinus に王權を興へたのは各 Carnutes, Cenones の如き徹底的反ローマ派を牽制せんが爲の法に過ぎなかつたと見る方が妥當であらう。彼は其等のものを巧妙にあやつることをわきまへてゐたに過ぎぬ。ただ覇權を目指し、玉座をねらふ者等は其の主義主張の性質上、ローマを利用することは殆んど不可能であつた事は認めねばならぬ。此處にフェステルの説は眞理を藏する様に思はれる。

ケーザルが最初の遠征には<sup>(十)</sup> Dumnorix と其の仲間の抵抗を受けただけであつたが、<sup>(十一)</sup> 第二回目には Remi を除く全 Belgae の反抗を受けねばならなかつた。第三回目には海岸地方の Civitas から例外なく抵抗された。ただ Auleri Eburvices と Lexovii の Senatus は抵抗の無益なことを豫知して非戦論を唱へたが其等のものは、たちまち仲間から殺戮されてしまつた。<sup>(十二)</sup> 第四回目、第五回目は主として Germania と Britannia の征服にローマの銳鋒が向けられてゐたが本陣地の Belgae では絶えず不安の色が漲つてゐた。第六回目 Aduatua の災禍があつて後はケーザルは Aedui と Remi とを除いて全ガリヤに疑惑の眼差を向けねばならなくなつてゐた。第七回目 Vercingetorix に對抗せる Arverni の共和主義者等は政策上からケーザルと提携する様になつた。この他ケーザルが味方とし得たものは Aedui の中の一派と Remi 及び Lingones に加ふるに遠隔の Treveri だけであつた。味方と雖も之等のものは、ただケーザルに對し積極的反對行動を避けたまでの話で、ローマ軍には無氣味な傍觀者に他ならぬもの

であつた。斯く觀じ來ればケーザルの遠征當初に於けるガリヤと、其より數年を経過した後のガリヤとの間に於ては其の政情が全く變化してゐることを認めなければならぬ。大勢上ケーザルは其の遠征の初期にあつては明かに親ローマ派の望んでゐたところのものを遂行したのである。即ち Helvetii の歸郷と、Ariovistus の驅逐と、更に Germani の征討とを順次に成就して行つた。ケーザルの遠征によつて Germani の恐怖が次第に拭はれて行くにつれてガリヤ人の上にはローマの壓力が感じられて來たことは明白である。ケーザルに據ることは、たとへ漠然ながらもせよ、ローマの支配下に立つことに他ならず、やがて其がローマの屬國となることを意味して來る様になつた。其は彼等の永い傳統的名譽と自尊心とにかけて到底耐えることの出來ぬ前途であつた。ローマ軍を前にし Alisia 城塞に立籠つた人々が軍事會議を催した時、動搖せる其の會議の席上で Critognatus が痛烈に喝破したローマ軍の征服意圖と之に對する全ガリヤの憤懣とは當時の事情を實によく物語つてゐるものである。<sup>(十三)</sup>斯くて彼等は從來の徒らなる黨派的競争心を終にケーザルの驚くべき武力の前に脱ぎ棄てなければならぬ時を迎へたのであつた。

*Quieta Gallia Caesar, ut constituerat, in Italiam ad conveniendum agendos proficiscitur* (ガリヤは靜穩

<sup>(十四)</sup>

となつたのでケーザルは決心せる所に從ひ巡回裁判を行ふべくイタリヤに向つた)と云ふ文句によつてケーザルの書の第七卷(52 B. C. の分)は始まる。ケーザルが畢生の大事業であつた *Bellum Gallicum*

の間に於て最も偉大な運命に直面した52 B. C.の記事が此の句に始まると云ふ事は誠に興味深い。吾人は今、此處に *Vergingetrix* によるガリヤの糾合を逐一、閲して見よう。前述の如くケーザルが第六回目の遠征を終へてイタリアに向け出發した當時ガリヤは靜穩であつた。けれども其は決して平和では無かつた。暴風の前の靜けさであつたのである。彼がガリヤに背を向けるや否や、既に動亂の徵候は動き始めてゐた。ガリヤの人々は其の祖 *Dis Pater* の子孫たることを忘れず曾て彼等の祖先がローマに投げ與へた *ἡτρός νευκρημένους ὄδυν* (敗者に苦痛あれ) の歴史を忘れることが無かつた。過去に於て間歇的に謀叛しては痛烈に壓服させられてしまつた諸々の *Civitas* は今に至つて漸く結合的氣運に動いてゐた。ガリヤ中央部にあつても先づ *Denones* と *Carnutes* とが歩み寄つてゐた。祕密な會合が森の奥や人里離れた淋しい場所で行はれた。彼等は *Denones* の *Ageo* の死を悲しみ合つた。 *Ageo* の死刑によつてケーザルがガリヤを *Provincia Romana* にしようとしてゐることは最早、何等の疑ひも無く明らかな事となつた。やがて同じ運命の手が彼等の上にも及んで來るべきを知つて、彼等は全ガリヤのために其の悲しき宿命を歎き合つたのである。此處に彼等は共に奮ひ立ちガリヤの自由の爲に其の身命を賭して闘はねばならぬと決心した。(十七) あだかもよし當時ローマは重大な政治的危機に瀕してゐた。暴漢クロヂウスがミロー一味の手に斃れ、續いて暴動が起り、諸々の殿堂に火が放たれ、街路には血腥い血が流された。勿論、この事件はガリヤ人の想像により何倍か潤色されて喧傳されたことであらう。ケーザルが此の内亂に拘



束されてイタリアを離れ得ずんば彼のガリヤ駐屯軍は自らガリヤ人の掌中に歸すべきものであり、もし然らずとするも、今や直に全ガリヤが蜂起してケーザルと其の駐屯軍との間を斷つならば勝利は言はずして明かであると云ふのが一致した見解であつた。此處に彼等は *liberius atque audacius de bello consilia inire incipiunt* (一層、自由に且つ大膽に戰鬥計畫を開始する) ことが出来たのである。さて彼等は互

に祕密の漏洩を恐れて人質を取交はし、軍旗の前に嚴肅な誓約を立て、時期を定めた上、それぞれ歸國した。(十九) 破綻は先づ *Carnutes* によりもたらされ *Canabum* でローマ人の虐殺が行はれた。そして *Coler-*

*iter ad cunnes Galliao civitates fune perferitur* (この報告は迅速にガリヤの凡ゆる *Civitas* に傳へられた) (廿) 彼等が漸く其の本來の性格に立歸つて此處に全ガリヤの戰雲が頓に急を告げた。折しも *Vercingetor-*  
ix なる一英雄が *Auverni* の中から現はれてガリヤ史上に大きな波紋を描くことになつた。(廿一)

由來ガリヤの人々は地理的統一性に恵まれてゐた上にケーザルの席捲に遭つて、一層民族的統一の色彩を深め、他方祖先の武名と宗教的信念とはげまされて反ローマの大運動を起すことになつたのである。即ち *kai yap ti qusei kai tois politeumaton epepeis eiru kai suryeneis alhthais ctou* (何となれば之等の人々は皆に其の性格や政情に於て同一なりしに止まらず互に血を分けた仲間であつた) (廿二)、  
*Rhenus, Alpes, mare internum, Pyrenaei, Oceanus* に圍まれた天與の統一的地域に共棲してゐたのである。且つ又 *συνίασι δὲ κατὰ πλῆθος πέδιλας διὰ τὸ ἀπλοῦν καὶ ἀθρόατον, συναγαγανταύτων τοὺς ἀδελφεύ-*

*obai Sakōtōu dei Tōu Nōryōu* (彼等は單純且つ素直な性質によつて容易に集合し大群を作つたし、彼等は隣人にとつての災禍を互に分け合ふのが常であつた)<sup>(廿三)</sup>のである。斯くて中部ガリヤの諸 *Civitas* は *Vercingetorix* の許に集り、彼は *Bituriges* をも味方に加へ、瞬時にして其の運動の鍵を握ることが出来た。<sup>(廿四)</sup>

グネウス・ポンペイウスの努力によつて後顧の憂を斷つことが出来たケーザルが先づ第一に遭遇した難關は如何にしてガリヤ内地に駐屯せる部下と合體するかの問題であつた。折しも *Vercingetorix* の部下として大膽無敵の名を得た *Lucetius* なるものが、*Nitiobriges*, *Ruteni*, *Gabali* 等を糾合して *Provincia* に迫つて來た。此處に於てケーザルは何よりも先づ *Provincia* に赴き *Helvia* の領地に兵を集めて之に備へ敵の退くのを待つて、更に騎兵を放ち雪に埋れた *Covenna Mons* を越えて敵の虛を突き、斯くて *Arverni* の間に一大恐慌を起さしめた。<sup>(廿六)</sup> *Vercingetorix* の關心が此處に集中されるやケーザルは計畫的中せるを知つて密かに然かも神速に *Vienna* に至り、疾風の如く *Aedui* を驅け抜けて *Lingones* の *Agedincum* <sup>(廿七)</sup> に入り、自分の部下と合體してしまつた。斯くてガリヤ人がねらつた最初の期待は、第一歩に於てケーザルの智略にむざむざと葬り去られてしまつたのである。

之を知つた *Vercingetorix* は *Boii* の城塞 *Gorgobina* を攻略にかかつた。ケーザルは先づ *Senones* の要塞 *Vellaunodunum* を陥し、次で *Carnutes* の首邑 *Cenabum* を略し、更に進んで *Bituriges* の要

塞 Noviodunum を掌中に歸し、此處に大舉して Bituriges の首邑 Avaricum の攻略に取りかかつたの

(廿八)

である。ローマ軍によつて取られた、斯かる破竹の如き行動を見て、Vercingetorix は新にガリヤの作

戦計畫を工夫せねばならなかつた。そして omnibus modis huic rei studendum, ut pabulatione et com-

meatu Romani prohibeantur (ローマ人が飼葉糧食を得ざる様に凡ゆる方法が講ぜらるべきである)と

(廿九)

定められた。斯くてローマ軍の掠奪の手が伸びる前に凡ゆる物質が焼却されると云ふことになつた。そ

して haec si gravia aut acerba videantur, multo illa gravius aestimare, liberos, coniuges in servitut-

em abstrahi, ipsos interfici; quae sit necesse accidere victis (たとへ之等の方法が悲惨な苛酷なもの

に見えようととも、彼等は其の妻子が奴隸として引去られ自分等は殺されると云ふ敗者の避け難き運命の

方が遙かに慘めなものであると思はなければならなかつた)のである。たつた一日の間に廿有餘の都邑

が灰燼に歸した。ただ最後に勝利を得ると云ふ望一つのために凡ゆるものが火中に投せられた。そして

全ガリヤに於ける最も美しき都邑として Bituriges の守りでもあり飾りでもあつた Avaricum の城塞も

終に其の存亡が問はれることになつた。焼き棄ててしまはうと云ふ Vercingetorix の主張は之を失ふま

いとす

る Bituriges 人の哀れな涙によつて撓められてしまつた。Avaricum の籠城はガリヤ人がローマ

人に與へた最初の頑強な抵抗であつた。彼等は Si id oppidum retinuisset, summam victoriae constare

intellegebant

(もし此の城塞を支へ得たならば勝利の凡てを決するものであると認めたと)からである。

ケーザルは糧秣の問題に關してガリヤ人の燒棄戦法に加ふるに Aedui の冷淡と Boii の貧困とのため  
多大の辛苦を経験せねばならなかつた。然も、なほよく不屈な彼の努力と驚くべきローマ軍の勇氣とに  
よつて之に打克つことが出来たのである。そして終に Avaricum は萬策盡き果ててローマ軍の手に落  
ち、ガリヤ人の上に大虐殺が行はれた。<sup>(卅三)</sup>斯くてガリヤ人が目論んだ第二の期待は、武勇比なきケーザル  
のローマ軍によつて水の泡と消えたのである。

Avaricum の陥落は全ガリヤに暗い影を投げずには置かなかつた。けれども Veringetorix は決して  
之に屈しなかつたのである。彼は Avaricum の陥落を以て Bituriges の無智とガリヤ殘部の冷淡とに歸  
して曰く Id tamen se celeriter maioribus commodis sanaturum. Nam quae ab reliquis Gallis civitates  
dissentirent, has sua diligentia adiuncturum atque unum consilium totius Galliae effecturum, cuius con-  
sensui ne orbis quidem terrarum possit obsistere ; idque se prope iam effectum habere (けれども彼  
は敏速に一層大なる利益によつて之を補はう。彼は自ら努力してガリヤ殘部のものと一致しなかつたも  
の等を味方に寄せつけ、全ガリヤを通じて一つの方策を立て、其の結合は世界と雖も之に拮抗し得ぬも  
のとなすべく、最早、殆んど彼は其を成立せしめてゐるのである)<sup>(卅四)</sup>と。實際、彼は贈賄と約束によつ  
て殘餘の Civitas 等を買収するに力めたのである。全ガリヤの氣運は漸くローマの何たるかを知り Ava-  
ricum の悲慘な陥落は期せずして Veringetorix の上に多大の同情と援助とをもたらすことになつた。

斯くて彼の勢力は以前に優るとも劣らぬものとなつて來たのである。(卅五)

ケーザルは *Avaricum* に數日兵を息めて後、軍隊を二分し、一は *Labienus* を司令として *Senones*,

*Parisii* 方面へ、他はケーザル自ら之を率ゐて *Arverni* の城塞 *Gergovia* に向つた。(卅六)

間に内訌生じローマ軍に一抹の不安を與へたがケーザル *Gergovia* の攻圍の間に *Vercingetorix* は彼等

を完全に買收してしまつた。之は現在二分されてゐるローマ軍にとつて少なからざる一大打撃であつた

様に思はれる。ローマ軍は管にガリヤに於ける其の活動の足場を拂はれたに止まらず、之によつて全ガ

リヤの空氣が極めて險惡になることを豫想せざるを得なかつたのである。ローマ軍は此處に最も信賴す

べき根據を失ふことになつた。(卅八) *Gergovia* にあつたケーザルは此の報を聞くや直に *ipse maiorem Galliarum*

*motum exspectans, ne ab omnibus civitatibus circumstisteretur, consilia inibat quemadmodum ab Ger-*

*govia discederet ac rursus omnem exercitum contraheret, ne profectio nata ab timore defectionis sim-*

*ilis fugae videretur* (ガリヤには更に大なる運動が起るべきを豫知し、凡ての *Civitas* から包圍される

が如きこと無きやう *Gergovia* から退軍し、然も暴動の憂慮から、實行すべき出發をば逃走と見られな

い様にして全軍を再び集中すべく策をめぐらし始めた。(卅九) 斯くてケーザルは極めて不利な激戦の後 *Ger-*

*govia* を威嚇し牽制しつつ軍を返して *Aedui* に向つた。(四十) 事態は極めて險惡とならざるを得なかつた。要

するにケーザルは *Gergovia* を陥し得ずして退軍したのである。全ガリヤは初めて此處にローマ軍必ず

しも無敵ならざるを知つた。然もローマ軍の倉庫となつてゐた Aedui は今や完全に叛旗をひるがへしケーザルは前後に敵を受けて Provincia Romana との聯絡を全く絶たれてしまつた。今や凡てがローマ軍に不利となつた。けれども不屈なケーザルは斷乎たる決心と疾風の如き速度とによつて之と拮抗せんとし、逸早く Liger (Loire) を徒渉して Aedui を驅け抜け、好戦せる Labienus の軍と合體した。(四十一) ケーザルの豫想せる如く defectione Aedunum cognita bellum augetur (Aedui の謀叛が報道さるるや戦禍は擴大した)。全ガリヤの軍事會議が Bibracte に召集され eodem conveniunt undique frequentes (其地に各方面から多數のものが集つた)。そして Veringetorix が彼等の總司令に選ばれた。此の會議に參與せざりしものは僅かに Remi, Lingones, Treveri あるのみであつた。(四十二) ケーザルは Provincia Romana との交通を遮斷されたと知るや、直に Germani に使を派して其の騎兵と輕装歩兵とを召集した。そして出来るだけ Provincia に接近して戦地を占めようと努めた結果、終に Alisia の決戦となつたのである。(四十四)

Veringetorix が味方に引入れた兵數は實に尨大なものであつた。今ケーザルの書に現はれた彼等の名稱と兵數とを列擧して見れば

350000.....Aedui 及び其の Clientes (Segusiavi, Ambivareti, Aulerei Brannovices, Blannovii)

350000.....Arverni 及び其の Clientes (Eleuteti, Cadurci, Gabali, Vellavii)

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三五)

一一九

12000人.....	Saquani
12000人.....	Sanones
12000人.....	Bitu iges
12000人.....	Santoni
12000人.....	Reteni
12000人.....	Carnutes
2000人.....	Bellovaei (Vo. gingetorix の希望は 10000人であつた)
10000人.....	Lemovices
8000人.....	Pictones
8000人.....	Turoni
8000人.....	Parisii
8000人.....	Helvetii
5000人.....	Suessiones
5000人.....	Ambiani
5000人.....	Mediomatrici

5000人	Petrocorii
5000人	Nervii
5000人	Morini
5000人	Nitiobriges
5000人	Auleri Cenomani
4000人	Atrebatas
3000人	Veliocassas
3000人	Lexovii
3000人	Auleri Eburvices
2000人	Rauraci
2000人	Boii
30000人	Armoricae (Curiosolites, Redones, Ambibarii, Caletes, Osismi, Veneti, Lemovices, Venelli)

計. 273000人

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て (近山)

(三六)



(四十五) 之は實際、全ガリヤを網羅した恐るべき兵數であつた。誠にケーザルの言ふ如く *tanta unive-*

*rsae Galliae consensus fuit libertatis vindicandae et pristinae belli laudis recuperandae, ut neque ba-*  
*neficiis neque amicitiae memoria moverentur, omnesque et animo et opibus in id bellum incumberent.*

(自由の保持と昔の武名の回復とに對するガリヤ全體の一致結束は極めて強力なものであつた故に何等の恩誼も友誼の記憶も彼等を動かすことが出來ず、彼等凡てのものは全心全力を擧げて戰爭に熱中する様になつた) (四十六) (四十七) そして之等のものは *omnes alacres et fiducia pleni ad Alesiam profiscuntur* (凡て意氣と信念とに燃えて Alesia に向つた) (四十八) のであつた。

之に對してケーザルは當時、補助兵も入れて十個軍團しか有つてゐなかつた。凡そ歩兵軍團 (騎兵約三百人を附するのが常である) は通常約五千人を以て單位とするのであるが實際ケーザルの有してゐた軍團は之よりも遙かに少數であつたらしく二軍團で騎兵も加へて然も七千人に足らなかつたのである。 (四十九)

之によつてケーザルの兵數を推せば實に三萬五千の少數に止るのであり、之に Germani の騎兵隊を加へても到底ガリヤ兵の一割五分に達することが六ヶ敷いのである。 (五十) 然も Alesia の決戦に於てケーザル

は其の差を實に自らの豪膽なる處置と精英無比なる部下と、驚嘆すべき速力と、 (五十一) 然して恵まれたる幸運とにより補ひ得たのであつた。 (五十二) 更にもう一つ、ローマ軍の武器が彼等のものに比して非常に優れてゐた

ことを忘れてはならぬ。之等の要素に加ふるに彼は其の往年の仇敵 Germani を偉大なる援助者となす

に成功したものであり、Germaniの騎兵隊はローマの陣中にあつて圖らずも忠勇無比なものとなつた。

Biturigesの要塞 Noviodunumを攻圍した際、最も功勞のあつたのは之等の騎兵隊であつた、全ガリヤ(五十三)

が鼎の湧く様に擾ぎ立つた時、東北の Treveriを牽制して、よくローマに叛かしめなかつたものは Ger-

rmaniの力であつた。(五十四) Vercingetorixの軍を敗走させて Alesiaへ退かした殊勳は實に彼等の活躍に由

來したのであり、(五十五) Alesia攻圍の際ローマ軍危急の際に現はれては局面打開の任にあつたのも之等 Ger-

rmaniの騎兵であつた。(五十六)

凡そ Germaniとローマ人とがガリヤのために争ひ合つてゐた時にはガリヤは祖國を知らなかつた。

ローマ人が Germaniの勢力を掃蕩して行くにつれて漸くガリヤは自己の運命を感じ始めた。彼等が祖國の爲に共同して立上つた時、ローマは舊敵 Germaniと組して之に拮抗することになつたわけである。

結局 Alesiaの敗北は全ガリヤのローマに對する敗北であつた。彼等は相擁して闘つた英雄 Vercing-

etorixをケーザルの手に渡さねばならなかつた。(五十七) 斯くてガリヤは其の柱石を失つた。全ガリヤが祖國の

名譽と自由との爲に初めて精神的に統一されて一丸となつた時、英雄ケーザルの率あるローマ軍は之を

屈服させてしまつたのである。然してガリヤは一體となつてローマの麾下に屈せねばならなかつた。換

言せばガリヤが初めて統一らしいものを感じた時、最早、其はローマの領域と化してゐたのである。

ケーザル研究の大家 F. R. Holmesは「もし彼等にして他より干渉を受けず、或は一方の敵によつて

のみ攻撃せられたとすれば一人の *Vergingetorix* は、よく彼等を鑄て一丸となし、時満つれば一國家を成立せしめたことであらう。然るに彼等は一方に於て *Germania* 人に、他方に於てローマ人に威嚇せられ其の分裂的傾向を倍加せられたのであつた<sup>(五十八)</sup>と語つてゐるが、之は單なる想像であつて *Vergingetorix* の出現とローマの征服とを離して考へることは、そもそも重大なる矛盾である。黨派的な非實際的な移民の集合であつた當時のガリヤ人は到底自らの間から脈絡ある政體を樹立することは出来なかつたであらう。ガリヤ人に統一性を與へたものは傳統的宗教觀念を別として、惠まれた自然の環境とローマ人、*Germania* 人なる敵國外患であつた。勿論、一方に於て交通商業の發達はガリヤに於ける *Pagus* 相互の距離を縮めて利害を同じうさせ權威を唯一の小人に委ねるを許さず、王政は次第に其の影を薄めることになり、*Pagus* の孤立的勢力は漸次 *Civitas* の綜合的勢力へと推移して行つたのである。けれども *Civitas* 相互の關係に至つては前述の如く極めて對立的のものであり、同盟、被護と雖も曖昧な偶発的な不安定なものに過ぎなかつたのである。そして各 *Civitas* は互に他をうかがひ、然も其の内訌は絶ゆること無く、乞食と浪人とは全ガリヤに溢れてゐた。或はローマに、或は *Helvetic* に、或は *Aedui* に、或は *Arverni* に、或は *Diviciacus* に、或は *Dumnorix* に、凡てのものが皆、黨派に分裂せねば止まなかつた。そして國家と云ふものは存在しなかつたのである。ただ彼等には往古の武名が淋しく残つてゐたに過ぎない。

かかるガリヤが斯くも短日月の間に、たつた一人の英雄 *Vercingetorix* の出現によつて少くとも精神的統一を完成したことは自ら其の直接原因をケールザルの大遠征に求めなければならぬのである。誠にローマ史の權威テオドール・モムゼンの言ふ如く「ギリシヤ人がペルシヤ人との戦争により、イタリヤ人がケルト人との戦争による如くガリヤ人はローマ人との戦争によつて其の國民的統一の存在と力とを知覺したものであらう」と思はれる。

最後に吾人はガリヤが如何に自然の環境に恵まれてゐたかを近代地理學の大家 *Vidal de la Blache* の言葉によつて書き加へて置かうと思ふ。彼によればフランスは各地方が自然的に結合され其の住民が早くより互に混血し理解し合つた國であり、他の如何なる國も、これ程の大きさを有つもので斯くも變化に富むものは無ら。 *Il y a donc une force bienfaisante, un genius loci, qui a préparé notre existence nationale, et qui lui communique quelque chose de sain. C'est un je ne sais quoi qui flotte au-dessus des differences regionales. Il les compense et les combine en un tout : et cependant ces variétés subsistent, elles sont vivantes.* (其處には我が國民的生活を準備し、且つ其に或る健全なものを與へてくれた恵みの力、一つの *genius loci*……土地の精神……と云ふものがあるのである。之は地方的差別の上を流れてゐる不可解な一つの力である。此の力は其等の差異を相償つて、其を一つの全體に結合せしめてゐる。然もなほ之等の差異は存在するのであり、生々としてゐるのである)。(六十)

斯くて古代ガリヤの政情に統一的氣運を醸し Veringetorix の出現を誘致し、Alisia の陥落に終らしたものは實に其の惠まれたる自然と傳統的宗教とケーザルのローマとであつたと言つても過言であるがごとし思ふ。

(I) Caesar : De Bello Gallico, I, 1, 31

(II) ib., VI, 24

(III) ib., VI, 11

(IV) ib., I, 31 ; VI, 11—12

(V) ib., II, 1

(六) Fustel de Coulanges : Histoires des institutions politiques de l'ancienne France—la Gaule romaine p. 52—53

(七) ib., p. 52. Note 3

(八) G. Bloch 著の *Damourcy* の翻譯を以て Ernest Lavisse : Histoire de France ; Tome I. part 2—Les origines : La Gaule independante et la Gaule romaine par M. G. Bloch. 1911—p. 70—72) に於て既に述べられたる如く。  
T. R. Holmes 著の *Caesar's conquest of Gaul*, Part II, § IV—Was the rebellion of Veringetorix a democratic movement?, p. 529—541) によつて democracy なる democracy の解釋を述べた如くである。

(九) Guglielmo Ferrero : the greatness and decline of Rome, II, P. 61—62

C. Jullian : Histoire de la Gaule, III, p. 315

(十) Caesar : De Bello Gallico, I. 及び II, III, etc. による。

(十一) 著の *Helvetii* 及び *Roma* の序の辭に於てあること勿論である。

(十二) Caesar : De Bello Gallico Gallico, III, 17. H. J. Edwards (Loeb Lib.) の譯文では the Auleri, Eburovices, and the Lexovii……と印をなすしるふが、これは明かに植字の間違ひで Auleri の次の、は取除かねばならぬ。

- (十三) Caesar : De Bello Gallico VII, 77
- (十四) ib, VII, 1
- (十五) ib, VI, 18
- (十六) Plutarch : Camillus, XXVIII, 5
- (十七) Caesar : De Bello Gallico, VII, 1
- (十八) ib, VII, 1.
- (十九) ib, VII, 2
- (二十) ib, VII, 3
- (二十一) ib, VII, 4
- (二十二) Strabon : IV, 4, (2)
- (二十三) ib, IV, 4, (2)
- (二十四) Caesar : De Bello Gallico, VII, 4—5
- (二十五) ib, VII, 6
- (二十六) ib, VII, 5, 7—8
- (二十七) ib, VII, 9
- (二十八) ib, VII, 9—13
- (二十九) ib, VII, 14

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣連の變遷に就て (近山)

- (#) ib, VII, 14  
(#一) ib., VII, 15  
(#二) ib., VII, 21  
(#三) ib, VII, 16—28  
(#四) ib., VII, 29  
(#五) ib., VII, 31  
(#六) ib., VII, 34  
(#七) ib., VII, 32—33  
(#八) ib., VII, 37—42  
(#九) ib., VII, 43  
(#十) ib., VII, 44—55  
(#十一) ib., VII, 56—62  
(#十二) ib., VII, 63  
(#十三) ib., VII, 64—65  
(#十四) ib., VII, 66—89  
(#十五) ib., VII, 75  
(#十六) ib., VII, 76

(四十七) 然も之等の兵數は極めて大なる猶豫を示してゐるのである。57 B.C. に於ける Battle 戦後の際のものゝを列擧すれば

(Caesar : De Bello Gallico, II, 4)

Bellovaeci .....	60000人 (實際は100000人とする事が出来た)
Suessiones .....	50000人
Nervii .....	50000人
Atrebatas .....	15000人
Ambiani .....	10000人
Morini .....	25000人
Menapii.....	7000人 (9000人とする Text もある)
Caleti .....	10000人
Vellocasses .....	10000人
Viromandui .....	10000人
Adnatuci .....	19000人

であり、多くて其の五割、少きものは實に少か〇割三分の出兵である。

(四十八) Caesar : De Bello Gallico, VII, 76

(四十九) ib, V, 24, 49

(五十) たとへ此の計算が實際以下であり、前の Gallia 兵數表が誇大視されたものであつたとしても(斯く彼の書は一般的な凡庸な批評家から世間並みに疑はれたものであつたが)なほ當時の事情から推してローマ軍の兵數と Gallia 軍の兵數との間には大きなひらきがあつたと推察される。

(五十一) 實際之まで Caesar が終始小を以て大を制し得たのは一に行動の迅速と云ふことであつた。Caesar が Gergovia 攻圍の際部下に興へた *hoc una celeritate posse mutari; occasionis esse rem, non proeli* (之はただ神速なることと云ひつのみ補はれ

古代ガリヤに於ける政治制度と其の統一的氣運の變遷に就て(近山)



る。問題は戦國ではなく機會である。(De Bello Gallico, VII, 45) と其々言葉は其の間の消息をよく傳へてゐる。

(五十二) Caesar の名を以て Multum cum in omnibus rebus tam in re militari potest fortuna (萬事に於て、その處に戰爭に於て大なるは幸運の力である) (De Bello Gallico, VI, 30) と其々の言はる。

(五十三) Caesar : De Bello Gallico, VII, 13

(五十四) ib., VII, 63

(五十五) ib., VII, 67

(五十六) ib., VII, 70

(五十七) ib., VII, 83

(五十八) F. R. Holmes : Caesar's conquest of Gaul, Part I, p. 23

(五十九) F. Mommsen : History of Rome, Tr. by. W. P. Dickson, V ch. VII p. 210

(六十) Ernest Lavisse : Histoire de la France, Tome I, Part I (Géographie de la France par M. P. Vidal de la Blache)  
pp. 49, 51—52

## 史料及び参考書

### 史料

Caesar : De Bello Gallico (原文) oxonii 1867.

- ib., tr. by H. J. Edwards (新英註) Loeb. 1930.
- ib., tr. by Artaud (新德註) Garnier 2vols.
- ib., tr. by W. S. Bohn & W. A. M' Davitts (新註) 1873.
- ib., tr. by Max Oberbreyer (德註) Reclam, 1877.
- ib., tr by Flamarion (德註) Les meilleurs auteurs classiques.
- Strabon : Geography. tr by H. L. Jones (新英註) Loeb. 7vols 1917--1930.
- ib., tr. by H. C. Hamilton & W. Falconer (新註) Bohn 3vols 1854.
- Polybius : History. tr. by W. R. Paton (新英註) Loeb. 6vols 1922--27.
- ib., tr. by Pierre Walz (德註) Garnier 4vols 1921.
- ib., tr. by Shuckburgh (新註) 2vols.
- T. Livius : History. tr by B. O. Foster (新英註) Loeb. 6vols. 1922--
- ib., tr. by Liez, Dubois, Verget & Corpet (新德註) Garnier 7vols.
- ib., tr. by G. Baker (新註) 6vols. 1797.
- Justinus : History tr. by J. Pierrot & E. Boitard (新德註) Garnier.
- V. Paterculns : History tr. by Frederick W. Shipley (新英註) Loeb. 1924.

- ib, tr. by Després & Gréard (竊按註) Garnier.
- L. A. Florus : History tr. by E. S. Forster (竊按註) Loeb. 1929.  
 ib, tr. by Ragon (竊按註) Garnier.
- Appianus : History t. by H. White (竊按註) Loeb. 4vols. 1912—13.
- Plutarch : Lives. tr. by B. Perrin (竊按註) Loeb. 11vols. 1916—28.
- Tacitus : History tr. by C. H. Moore (竊按註) Loeb. 1925.  
 ib, tr. by J. L. Burnouf (竊按註) Garnier.
- Germania. tr. by M. Hutton (竊按註) Loeb. 1914.  
 ib, tr. by J. L. Burnouf (竊按註) Garnier.
- Suetonius : Lives tr. by J. C. Rolfe (竊按註) Loeb. 2vols. 1914.
- Cicero : Brutus tr. by M. Golbéry (竊按註) Garnier.
- Dio Cassius : History tr. by E. Cary (竊按註) Loeb. 9vols. 1914—27.

史 略 叢 書

T. R. Holmes : Caesar's conquest of Gaul 1911.

Fustel de Coulanges : *Histoires des institutions politiques de l'ancienne France - la Gaule romaine*, 1891.

Camille Jullian : *Histoire de la Gaule I-III*, 1924.

Tome I—*Les invasions gauloises et la colonisation Grecque.*

Tome II.—*La Gaule indépendante.*

Tome III—*La Conquête romaine et les premières Invasion germanique.*

Ernest Lavisse : *Histoire de la France*, Tome I 1911.

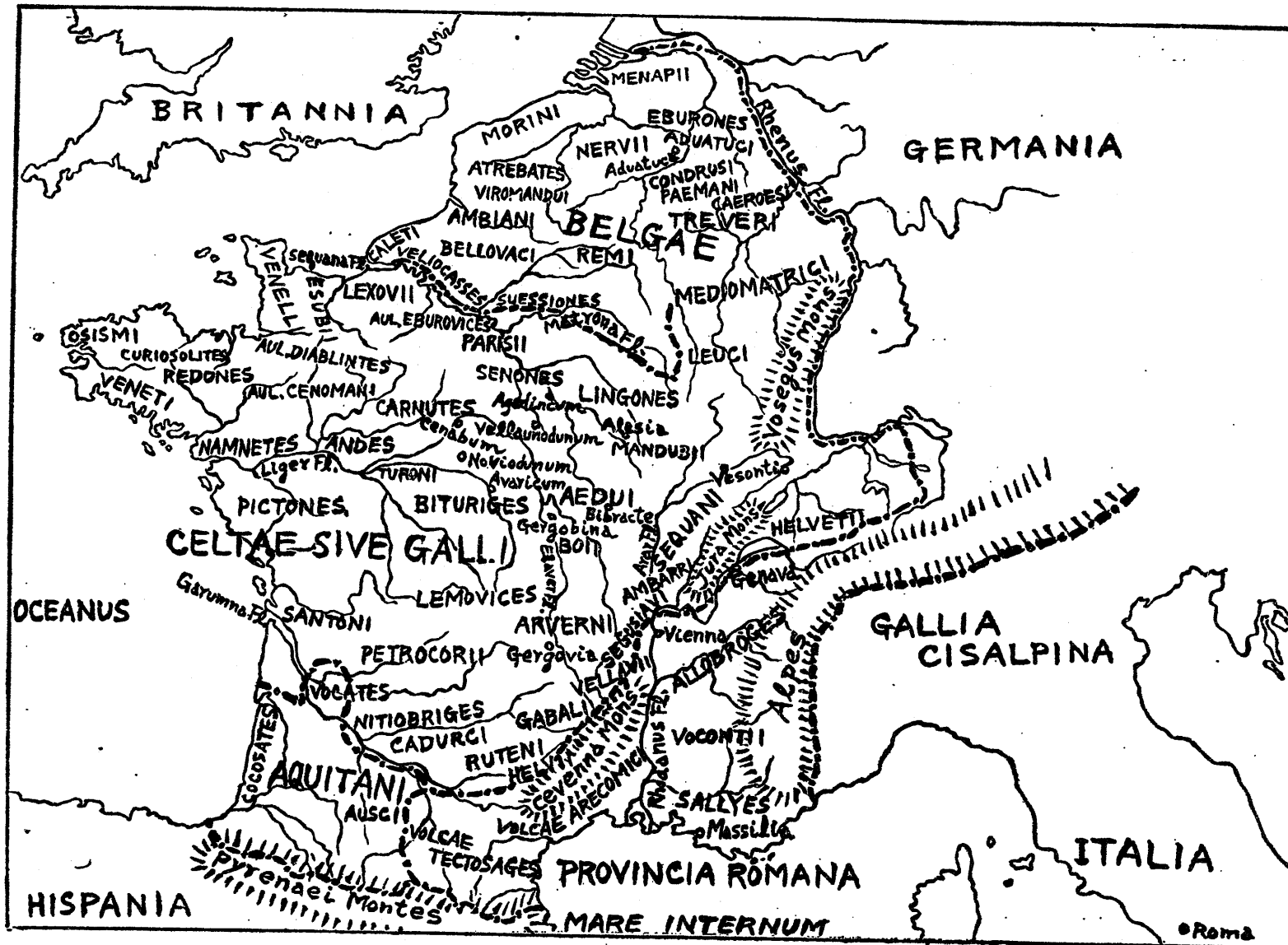
part I—*Tableau géographique de la France*, par M. P. Vidal de la Blache.

part II—*Les origines : La Gaule indépendante et la Gaule romaine*, par M. G. Bloch.

Theodor Mommsen : *History of Rome (Everyman's Lib.)* 4vols. Tr. by W. P. Dickson, 1920.

Fr. Funck-Brentano : *Les origines*, 1915.

Guglielmo Ferraro : *The greatness & decline of Rome* Tr. by Alfred E. Zimmern 2vols., 1907.



古代ガリヤに於ける勢力分布圖